

Bhaṭṭikāvya 研究—BhK 6.71–86: nirupapadakṛdadhikāra*

川村 悠人

1 はじめに

パーニニ文法の体系において、A 3.1.91 dhātoḥ (「動詞語根の後に」) の支配下規則により導入が規定される接辞には、それが定動詞接辞 (tiN) である場合を除いて、A 3.1.93 kṛd atin̄により kṛt という術語が適用される。kṛt 接辞で終わる項目は、taddhita 接辞で終わる項目並びに複合語と同様、A 1.2.46 kṛttaddhitasamāsāś ca により名詞語基 (prātipadika) と呼ばれ、名詞接辞導入の操作対象となる (A 4.1.2 svaujasamauṭchaṣṭābhyāmbhisnebhyaṃbhyasnasibhyāmbhyasnasosāmnyossup)。kṛt 接辞が動詞語根の後に直接導入されるのに対し、taddhita 接辞は原則として名詞語基から派生した名詞接辞で終わる項目 (subanta) の後に導入され (A 4.1.82 samarthānām prathamād vā)、複合語の形成もまた名詞接辞で終わる項目の存在を必要とする (A 2.1.4 saha supā)。名詞接辞導入、taddhita 接辞導入、複合語形成の前提となる名詞語基を供給するという意味において、kṛt 接辞導入規則は名詞形成において重要な地位を占めると言うことができる。バツティ (Bhaṭṭi、6世紀後半–7世紀前半) が Bhaṭṭikāvya 主題の部 (adhikāraḥ) において、taddhita 接辞導入規則と複合語形成規則を全く例証せず kṛt 接辞導入規則の例証に傾注していることは、その傍証に他ならない¹。

Bhaṭṭikāvya の伝統的注釈者達によれば、kṛt 接辞導入規則を例証する BhK 5.97–7.85 により構成される kṛdadhikāra は次のように分類される²。

(a) ṭādhikāra (例 vane + car + ṭa → vanecara 「森で苦行する者」)³

BhK 5.97–100 → A 3.2.16 careṣ ṭaḥ–A 3.2.23 na śabdaślokalalahagāthāvairacāṭusūtramantrapadeṣu //

kṛt 接辞 ṭa は共起項目 (upapada) の存在を条件として動詞語根の後に導入される接辞の一つであり、A 3.4.67 kartari kṛt により〈行為主体〉(kartari) を表示する。ṭādhikāra という名称は、A 3.2.16–A 3.2.23 が全て ṭa に関わる文法操作を規定していることに起因する。

(b) kṛtyādhikāra (例 pracch + tavyaT → praṣṭavya 「問われるべきもの」)

BhK 6.46–67 → A 3.1.95 kṛtyāḥ–A 3.1.132 cityāgnicitye ca //

A 3.1.95 kṛtyāḥ の支配下規則により導入が規定される接辞には、kṛt に加えて kṛtya という術語が適用される。kṛtya と呼ばれる接辞は原則として A 3.4.70 tayor eva kṛtyaktakhalarthāḥ により〈行為〉(bhāva) または〈目的〉(karman) を表示する。なお、パーニニ文法家達は二種の〈行為〉(bhāva) を識別している。〈内的行為〉(ābhyantarabhāva) と〈外的行為〉(bāhyabhāva) である。前者は動詞語根の意味としての〈行為〉である。一方、後者は pāka (「料理行為」) 等といった行為名詞が表示する〈行為〉であり、それは実体同様に扱われる (dravyavat)。kṛtya

*本研究は JSPS 科研費 25・1124 の助成を受けたものである。

¹主題の部の構成については Kawamura: forthcoming を見よ。

²ジャヤマンガラは (c)–(k) に kṛdadhikāra という名称を与えるが、(a)–(b) も A 3.1.93 により kṛt と呼ばれる接辞を扱う箇所であるから、本稿ではそれらも kṛdadhikāra に含めて論ずる。

³vanecara という複合語は名詞接辞 (sUP) にゼロ (luK) が代置されない aluksamāsa である。A 6.3.14 tatpuruṣe kṛti bahulam // (「tatpuruṣa において、kṛt 接辞で終わる項目が複合語の後続要素である時、先行要素に後続する第七格接辞にゼロが代置されないことが多様に起こる」)

接辞や Kta 接辞が表示するのは前者であり、(k) で見る GHaÑ 等の kṛt 接辞が表示するのは後者である⁴。

- (c) **nirupapadakṛdadhikāra** (例 kṛ + ṆvuL → kāraḥ 「[ラーマと] 同盟を結ぶ [スグリーヴァ]」)

BhK 6.71–86 → A 3.1.133 ṇvultṛcau–A 3.1.150 āśiṣi ca //

当該箇所については本論 2 を見よ。

- (d) **sopapadakṛdadhikāra** (例 śatru + lū + aṆ → śatrulāva 「敵を切り裂く者」)

BhK 6.87–93 → A 3.2.1 karmaṇy aṇ–A 3.2.16 careṣ ṭaḥ //

A 3.2.1–A 3.2.16 により扱われるのは、共起項目の存在を根拠として動詞語根の後に導入される kṛt 接辞である。A 3.4.67 により〈行為主体〉を表示する。

- (e) **khaśādyadhikāra** (例 sattva + ej-i + KHaś → sattvamejaya 「動物達を恐怖させる [獅子]」)

BhK 6.94–108 → A 3.2.28 ejeḥ khaś–A 3.2.47 gamaś ca //

A 3.2.28–A 3.2.37 ugrampaśyerammadapānindhamāś ca は kṛt 接辞 KHaś、A 3.2.38 priyavaśe vadaḥ khac–A 3.2.47 は kṛt 接辞 KHaC に関する文法操作を規定する。KHaś も KHaC も共起項目が存在するときに導入される接辞であり、A 3.4.67 により〈行為主体〉を表示する。両接辞はともに KH 音を IT (指標辞 [anubandha]) として有する。KH 音を IT とする接辞で終わる項目が後続するとき、先行要素の最終母音には A 6.3.67 arurdviśadajantasya mum により mUM が付加される (sattvamejaya)。

- (f) **ḍādhikāra** (例 dūra + gam + Ḍa → dūraga 「遠くまで飛ぶ [矢]」)

BhK 6.109–6.111 → A 3.2.48 antātyantādhvadūrapārasarvānanteṣu ḍaḥ–A 3.2.50 ape kleśatamasoḥ //

A 3.2.48–50 が扱うのは、共起項目の存在を条件として動詞語根の後に導入される kṛt 接辞 Ḍa である。それは A 3.4.67 により〈行為主体〉を表示する。(a) と同様、A 3.2.48–A 3.2.50 が全て Ḍa に関する文法操作を規定していることから ḍādhikāra という名称が与えられる。

- (g) **upapadādhikāra**⁵ (例 śiṛṣa + han + ṆinI → śiṛṣaghātin 「頭を切り落とす者」)

BhK 6.112–133 → A 3.2.51 kumāraśiṛṣayor ṇiniḥ–A 3.2.101 anyeṣv api dṛśyate //

(d) と同様、A 3.2.51–101 は、共起項目の存在を前提として動詞語根の後に導入される kṛt 接辞を扱う。当該の kṛt 接辞も A 3.4.67 により〈行為主体〉を表示する。

- (h) **anupapadādhikāra**⁶ (例 kṛ + Kta → kṛta 「既になされたもの」)

BhK 6.134–136 → A 3.2.102 niṣṭhā–A 3.2.104 jīryater atrṇ //

(c) と同様、A 3.2.102–104 が扱うのはその導入に共起項目の存在を必要としない kṛt 接辞である。当該規則により導入が規定される Kta 以外の kṛt 接辞は、A 3.4.67 により〈行為主体〉を表示する。Kta は原則として A 3.4.70 により〈行為〉または〈目的〉を表示する。

⁴Cardona 1997: par. 297 及び Ogawa 2005: 58–60 を見よ。

⁵名称は異なるが、意図するところは sopapadakṛdadhikāra (「共起項目の存在を導入条件とする kṛt 接辞」と同じである。

⁶nirupapadakṛdadhikāra と意図するところは同じである。

(i) **tācchīlikādhikāra** (例 $kṛ + tṛN \rightarrow kartṛ$ 「森を巧みに揺らす [風]」)

BhK 7.1–27 \rightarrow A 3.2.134 ā kves tacchīlataddharmatatsādhukāriṣu–A 3.2.178 anyebhyo 'pi dr-
śyate //

A 3.2.135 $tṛn$ –A 3.2.178 は A 3.2.134 の支配下にある。A 3.2.135–178 により導入が規定される $kṛt$ 接辞は、 x をなす傾向にある (tacchīla) 〈行為主体〉、 x をなす義務がある (taddharma) 〈行為主体〉、あるいは x を上手になす (tatsādhukārin) 〈行為主体〉を表示する。

(j) **nirviśeṣakṛdadhikāra** (例 $kṛ + uṆ \rightarrow kāru$ 「ラーマの目的を」果たす [スグリーヴァ]」)

BhK 7.28–33⁷ \rightarrow A 3.3.1 unādayo bahulam–A 3.3.17 sṛ sthire //

A 3.3.1–A 3.3.17 により導入が規定される $kṛt$ 接辞は、上に述べたような、それら全てに共通する特質 (viśeṣa) や論題 (adhikāra) を持たない⁸。これが、当該規則を例証する BhK 7.28–33 が nirviśeṣakṛdadhikāra または niradhikārakṛdadhikāra と呼ばれる所以である。

(k) **ghañādyadhikāra** (例 $naś + GHaÑ \rightarrow nāśa$ 「死ぬこと」)

BhK 7.34–85⁹ \rightarrow A 3.3.18 bhāve–A 3.3.128 āto yuc //

当該箇所の特徴としては、A 3.2.20 parimāṅkhyāyām sarvebhyaḥ–A 3.3.112 ākrośe nañy anih に bhāve (A 3.3.18) と akartari ca kārake sañjñāyām (A 3.3.19) が継起する点が挙げられる。A 3.3.18–112 により導入が規定される $kṛt$ 接辞は、〈行為〉 (bhāva) または 〈行為主体〉 以外の kāraka (akartari-kāraka) を表示する。A 3.3.113 kṛtyalyuṭo bahulam 以降の規則では、 $kṛt$ 接辞の意味に関して個別の意味規定が考慮される。

Aṣṭādhyāyī において、A 3.1.93 kṛd atin から $kṛt$ という項目が A 3.4.76 kto 'dhikaraṇe ca dhrauvyagatipratyavasānārthebhyaḥ まで継起する。

A 3.1.93 kṛd atin //

A 3.1.94 vāsarūpo 'striyām //

A 3.1.95 kṛtyāḥ //

...

A 3.4.76 kto 'dhikaraṇe ca dhrauvyagatipratyavasānārthebhyaḥ //

⁷マッリナータは BhK 7.28–31 に unādi padoktapratyayādhikāra という名称を与える。しかし、当該箇所では例証されるのは unādi 接辞の導入を規定する A 3.3.1 unādayo bahulam だけではないから、ジャヤマンガラが BhK 7.28–33 に対して与える名称を採用する。

⁸JM on BhK 7.28 (146.20): ito viśeṣādhikārābhāvāt nirviśeṣakṛto darśayann āha /

⁹マッリナータは BhK 7.32–85 を ghañādyadhikāra と呼ぶ (テキストの ghañādhikāra を修正)。本稿では、BhK 7.28–33 を niradhikārakṛdadhikāra としそれを 7.34–85 と区別するジャヤマンガラ注に従う。ジャヤマンガラは 7.34–85 に特定の名称を与えないため、名称についてはマッリナータ注に与えられるものを提示する。なお、ジャヤマンガラは BhK 7.34–85 をさらに細かく分類する。

(k-1) BhK 7.34–67 \rightarrow A 3.3.18 bhāve–A 3.3.93 karmaṇy adhikaraṇe ca // (JM on BhK 7.34 [148.12]: atah param bhāve kartari ca kāraka ity adhikṛtya kṛd ucyate)

(k-2) BhK 7.67–77 \rightarrow A 3.3.94 striyāḥ ktin–A 3.3.112 ākrośe nañy anih // (JM on BhK 7.68 [156.22]: strīliṅgam adhikṛtyocyate)

(k-3) BhK 7.78–85 \rightarrow A 3.3.113 kṛtyalyuṭo bahulam–A 3.3.128 āto yuc // (JM on BhK 7.78 [159.6]: itah strīliṅgabhāvam nivartya kṛd udāhriyate)

規則数は497である。そのうち、*Bhaṭṭikāvya*の*ḥṛdadhikāra*においては、ヴェーダ語に関わるものを除いて318規則が扱われており、およそ六割五分にあたる。そして、(a)が別立てされていることを除けば、(b)–(k)ではパーニニ文典における規則の配列順序通りに*ḥṛt*接辞導入規則が例証されていく¹⁰。

(a)–(k)のうち、川村2013では(d)を取り上げ、バツティがなす規則例証の諸特徴を指摘した。(d)との関連のもとバツティの規則例証原理に関する考察を深めるべく、本稿は(c)を扱う。BhK 6.71–86の和訳とA 3.1.133 *ṇvultṛcau*–A 3.1.150 *āśiṣi ca*を例証するバツティの表現に対する解説を企図したものである。

2 nirupapadakṛdadhikāra

A 3.1.91の支配下規則において第七格接辞で終わる項目により指示される項目は、それが口語(*bhāṣā*)や聖典語(*chandās*)といった言語領域を示すもの及び接辞導入の意味条件を与えるものである場合を除き、次の規則により*upapada*(「共起項目」と呼ばれる)。

A 3.1.92 *tatropapadaṃ saptamīstham //*

「A 3.1.91 *dhātoḥ*の支配下にある規則中で、第七格接辞で終わる項目によって指示される項目は*upapada*と呼ばれる」

A 3.1.133–150は、*upasarga*が共起項目であることを*ḥṛt*接辞導入の条件として提示するA 3.1.136 *ātaś copasarge*とA 3.1.137 *pāghrādhmādhedḍṛśaḥ śaḥ*(A 3.1.136から*upasarge*が継起)を除き¹¹、*ḥṛt*接辞の導入に共起項目の存在を要求しない。*Bhaṭṭikāvya*の注釈者達はA 3.1.133–150により導入される*ḥṛt*接辞を「共起項目の存在を導入条件としない*ḥṛt*接辞」(*nirupapadakṛt*)と呼び¹²、それら規則を例証するBhK 6.71–86を*nirupapadakṛdadhikāra*と呼ぶ¹³。なお、A 3.1.133–150により導入される*ḥṛt*接辞は全て、A 3.4.67により〈行為主体〉を表示する。

バツティがBhK 6.71–86において使用する表現とそれによって例証される規則の対応は以下の通りである。

- BhK 6.71: *sakhyasya tava . . . kāraḥ* (「貴方と同盟を結ぶ [スグリーヴァ]」); *draṣṭāsi maithilyāḥ* (「貴方はミティラーの王女をすぐに目にするでしょう」) → A 3.1.133 *ṇvultṛcau //*
- BhK 6.71–75: *kapinandanāḥ* (「猿達を喜ばせる [スグリーヴァ]」); *nandanāni munīdrāṇām* (「最上の聖者達を喜ばせる [森]」); *vāsanaiḥ* (「さえずる [蜂達と鳥達]」); *rocanaḥ* (「輝かしい [蜂達と鳥達]」); *ramaṇāni vanaukasām* (「森の住人達を魅了する [森]」); *udbhāsiṇi* (「光彩

¹⁰*tādḥikāra*のみが別立てされる理由、注釈者達による(a)–(k)への分類の意味、そして(a)–(k)それぞれの特質については本稿では詳論し得ない。別稿を用意する。

¹¹KV on A 3.1.136 (IV.207.22): *ākārakṭebhyo dhātubhyaḥ upasarge upapade kapratyayo bhavati /*

¹²ジャヤマンガラとマツリナータはそれぞれ次のような説明を与える。JM on BhK 6.71 (121: 9–11): *atha ḥṛdadhikāram āha / kṛtyānām ḥṛdantarbhāve 'pi bhāvakarmanoh kṛtyā iti viśeṣapratipādanārthaḥ pṛthagadhikārah / śeṣās tu kṛtaḥ kartari bhavanti / tatropapadaṃ saptamīstham ity etad adhikṛtam / yatrātan nāvatiṣṭhate tān kṛto darśayann āha /* (「次に*ḥṛt*部門を述べる。*kṛtya* [接辞]は*ḥṛt* [接辞]に含まれるとしても、*kṛtya* [接辞]は〈行為〉または〈目的〉を表示するという [接辞との] 違いを理解させるため、別々に部門が設定される。一方、残りの*ḥṛt* [接辞]は〈行為主体〉を表示する。A 3.1.91 *tatropapadaṃ saptamīstham* というこれは支配規則である。この [支配規則] が考慮されない *ḥṛt* [接辞] を示すために [バツティは以下の詩節を] 述べる」) SP on BhK 6.71 (I.186.20): *kṛtsu kṛtyān bhāvakarmanārthān uktvā kartrārthān ṇvulādīn nirupapadān adhikṛtyāha sakhyasyeti /* (「*ḥṛt* [接辞]のうち、〈行為〉または〈目的〉を表示する *kṛtya* [接辞] を述べた後、〈行為主体〉を表示する、共起項目の存在を導入条件としない *ṇvul* 等 [の接辞] を主題として、*sakhyasya* 以下を述べる」)

¹³JM on BhK 6.86 (125.16): *iti nirupapadakṛdadhikārah /*

を放つ [蓮達]); paribhāvīni tārāṇām (「星々を侮蔑する [蓮達]); manthīni cetasām (「心を掻き乱す [蓮達]); kadvadam (「不快に鳴く [鳥達]) → A 3.1.134 nandigrahipacādibhyo lyuṇinyacaḥ //

- BhK 6.76: vitṛdaiḥ yūnām (「若者達 [の心] を傷つける [鳥達と樹々]); ajñāḥ (「[感官対象の味を] 知らない者」); priyaḥ (「恋人」); kusumotkiraiḥ (「花々を降らせる [樹々]) → A 3.1.135 igupadhajñāpṛkīraḥ kaḥ //
- BhK 6.76: praglaḥ (「弱者」) → A 3.1.136 ātaś copasarge //
- BhK 6.77: ājighraiḥ puṣpagandhānām (「花香を嗅ぐ [蜂達]); dhvanīnām uddhamaiḥ (「羽音を立てる [蜂達]); madhūnām uddhayaiḥ (「花蜜を吸う [蜂達]) → A 3.1.137 pāgrādhmādhedṛśaḥ śaḥ //
- BhK 6.78–79: limpaiḥ iva tanoḥ (「体を塗るかのように吹く [風]); dhārayaiḥ kusumormīṇām (「一連の花を持つ [樹々]); pārayaiḥ bādhitum janān (「人々を苦しめることができる [樹々]); hṛdayānām udejayaiḥ (「心の動揺を誘う [樹々]); cetayaḥ (「人」) → A 3.1.138 anupasargāl limpavindadhāripārivedyudejicetasīsāhibhyaś ca //
- BhK 6.79: dadaiḥ duḥkhasya (「苦しみを与える [風]); dhārayaiḥ āmodam (「芳香を持つ [風]) → A 3.1.139 dadātidadhātor vibhāsā //
- BhK 6.79: jvalaḥ (「[悲しみの炎に] 焼かれる人」) → A 3.1.140 jvalitikasantebhyo ṇaḥ //
- BhK 6.80–82: avasāyakaṇāśrāvāḥ (「流れ落ちる露の滴」); cittasaṃsrāvam (「[悲しみに] 濡れた心」); avasāyaḥ . . . duḥkhasya (「苦しみを終わらせる [私]); jīvasya avahāraḥ (「命をとる [ヤマ]); madhunaḥ lehaiḥ (「花蜜をなめる [蜂達]) → A 3.1.141 śyādvadhāsrusaṃsravatiṇavasāvahṛlihaśliṣāśvasaś ca //
- BhK 6.82: dāvaiḥ (「火事」); nāyaḥ (「方策」) → A 3.1.142 dunyor anupasarge //
- BhK 6.83: samāviṣṭam graheṇa iva (「[不吉な] 惑星に打ちのめされたかのような [心]); grāheṇa iva āttam (「鰐に捕らえられたかのような [心]) → A 3.1.143 vibhāsā grahaḥ //
- BhK 6.83: gṛhān (「家」) → A 3.1.144 gehe kaḥ //
- BhK 6.84: nartakāḥ iva śākhinaḥ (「踊り子のような樹々」) → A 3.1.145 śilpini ṣvun //
- BhK 6.84: aligāthakaiḥ (「歌手のような蜂達」) → A 3.1.146 gas thakan; 3.1.147 ṇyuḥ ca //
- BhK 6.85: ekahāyanasāraṅgagatī (「一歳の子象のような足取りをした [ラーマとラクシュマナ]) → A 3.1.148 haś ca vrīhikālayoḥ //
- BhK 6.85: lavakau śatruśaktīnām (「巧みに敵の勢力をそぐ [ラーマとラクシュマナ]) → A 3.1.149 prusṛlvaḥ samabhihāre vun //
- BhK 6.86: aham bhūyāsam jīvakaḥ katham (「私が生きたいと願うことがありますか」) → A 3.1.150 āśiṣi ca //

規則中に提示される、文法操作を条件づける項目の配列順序と、それらに条件づけられた文法操作を例証する詩節中の語の配列順序の一致が見られる点 (BhK 6.71–75 → A 3.1.133–134; BhK 6.79 → A 3.1.139; BhK 6.80–82 → A 3.1.141–142) 及びパッティがパタンジャリ (Patañjali、紀元

前2世紀)の規則解釈を念頭に置いて規則例証をなす場合がある点(BhK 6.84 → 3.1.145)はこれまでの研究で指摘してきた通りである¹⁴。

特記すべきは、バツティがA 3.1.147 *nyuṭ ca*を例証しないことである。A 3.1.146 *gas thakan*は専門家(*śilpin*)である〈行為主体〉(*kartr*)が表示されるべきときに動詞語根 *gai*の後に *kṛt* 接辞 *thakan*が起ることを規定する。一方、A 3.1.147は同じ条件下で同じ動詞語根の後に *kṛt* 接辞 *Ṇyuṭ*が導入されることを規定する。一つにまとめて定式化できる両規則をパーニニ(Pāṇini, 紀元前500年)が別々に定式化しているのは、後続規則 A 3.1.148 *haś ca vr̥hikālayoḥ*に *Ṇyuṭ*のみを継起させるためにすぎない。バツティがA 3.1.147の例証を省略できたのは、以上のようなA 3.1.147定式化目的を考慮し、A 3.1.146とA 3.1.147を一对のものに見なしたからであろう¹⁵。この点をバツティの規則例証の特徴の一つとして新たに指摘しておきたい。

3 翻訳研究

BhK 6.71–86は、シーター(Sītā)が悪魔ラーヴァナ(Rāvaṇa)に連れ去られた後、様々な自然物に彼女への思いをかき立てられるラーマ(Rāma)の心情を描く場面である。

3.1 BhK 6.71–75 → A 3.1.133–134

BhK 6.71: *sakhyasya tava sugrīvaḥ* ^(1a)*kāraḥ* ^(2-1a)*kapinandanah* /
drutaṃ ^(1b)*draṣṭāsi maithilyāḥ saivam uktvā tiro'bhavat* //

「スグリーヴァは猿達を喜ばす者であるから、貴方(ラーマ)と同盟を結ぶでしょう。貴方はすぐにミティラーの王女(シーター)を目にするでしょう」彼女(山人)はこのように告げて、姿を消した¹⁶。

BhK 6.72: ^(2-1a)*nandanāni munīndrāṇāṃ* ^(2-1d)*ramaṇāni vanaukasām* /
vanāni bhejatur vīrau tataḥ pāmpāni rāghavau //

その後、ラグ家の二人の勇者(ラーマとラクシュマナ)は、パンパー湖のそばにある、最上の聖者達を喜ばせ森の住人達を魅了する森に身を寄せた。

BhK 6.73: *bhṛṅgālikokilakruṅbhir*¹⁷ ^(2-1b)*vāśanaiḥ paśya lakṣmaṇa* /
^(2-1c)*rocanaṅ bhūṣitāṃ pampāṃ asmākaṃ hṛdayāvidham* //

「ラクシュマナよ、さえずる輝かしい蜂の群れとコーキラ鳥とクラウンチャ鳥が彩りを添えるパンパー湖を見なさい。我らの心を貫いてしまうその湖を¹⁸」

¹⁴川村 2012; 2013 を見よ。

¹⁵詳細は本論 3.7 を見よ。

¹⁶Narang 1969: 90, note 4 は、BhK 6.71 で *pac* 群の中から動詞語根 *pac* のみが使用されて A 3.1.134 (Narang は 'A 2.1.134' とするが誤植である) が例証されると述べる。しかし、当該詩節で A 3.1.134 の例証のために使用されるのは *pac* ではなく動詞語根 *nand* の派生形 *nandana* である。

¹⁷マッリナータは *bhṛṅgālikokilakruṅbhir* と読む。意味は同じである。

¹⁸*hṛdayāvidh* (「心を貫く者」) は、*hṛdaya* と *vidh* (*vyadh*+ *KvIP*) の二語からなる複合語である。*kṛt* 接辞 *KvIP* で終わる *vyadh* が複合語の後続要素であるとき、複合語の先行要素の最終音には次の規則により長音が代置される (*hṛdayavidh* → *hṛdayāvidh*)。A 6.3.116 *nahivṛtivr̥ṣivayadhircisahitaniṣu kvau* // (「音の接続の領域で、*kṛt* 接辞 *KvIP* で終わる、動詞語根 *nah* (「結ぶ」)、*vṛt* (「起る」)、*vṛṣ* (「雨が降る」)、*vyadh* (「貫く」)、*ruc* (「喜ぶ」)、*sah* (「耐える」)、*tan* (「広げる」) が複合語の後続要素である場合、先行要素の最終音に長音が代置される。)

BhK 6.74: (2–2b) paribhāvīni tārāṇaṃ paśya (2–2c) manthīni cetasām /

(2–2a) udbhāsīni jalejāni dunvanty adayitaṃ janam //

「光彩を放つが故に星々を侮蔑する [ほど美しい] 蓮達を見なさい。それらは [人々の] 心を掻き乱し、愛する女性と別離する者を苦しめる」

BhK 6.75: sarvatra dayitādhīnaṃ suvyaktaṃ rāmaṇīyakam /

yena jātaṃ priyāpāye (2–3) kadvadaṃ hamsakokilam //

「どんなものでも、それに魅力を感じるかどうかは恋人の有無にかかっている。これは全く明らかだ。恋人がいないときは、ハンサ鳥とコーキラ鳥の鳴き声は不快に感じるから¹⁹」

(1) A 3.1.133 ṇvulṛcau //

「全動詞語根の後に kṛt 接辞 ṆvuL と ṛC が起こる」

[解説] (1a) sakhyasya tava . . . kārakaḥ (「貴方と同盟を結ぶ [スグリーヴァ]」) における kāraka (「～をつくる者」) は、動詞語根 kṛ (「つくる」) の後に A 3.1.133 により kṛt 接辞 ṆvuL が導入されて派生する語である²⁰。なお、sakhya (「同盟」) という語に後続する第六格接辞は A 2.3.65 karṭṛkarmaṇoḥ kṛti により〈目的〉(karman) を表示する。以下も同様である。

(1b) draṣṭāsi maithilyāḥ (「貴方はミティラーの王女をすぐに目にするでしょう」) において²¹、draṣṭ (「見る者」) は動詞語根 drṣ (「見る」) の後に A 3.1.133 により ṛC が導入されて派生する語である。

(2) A 3.1.134 nandigrahapacādibhyo lyuṇinyacaḥ //

「nand 群の動詞語根、grah 群の動詞語根、pac 群の動詞語根の後に、それぞれ kṛt 接辞 Lyu、NinI、aC が起こる」

[解説] (2-1a) kapinandanaḥ (「猿達を喜ばせる [スグリーヴァ]」) と nandanāni munīndrānām (「最上の聖者達を喜ばせる [森]」) における nandana (「喜ばせるもの」) は、使役接辞 NiC で終わる動詞語根 nand (「喜ばす」) の後に A 3.1.134 により kṛt 接辞 Lyu が導入されて派生する語である²²。(2-1b) の vāsana (「さえずるもの」) と (2-1c) の rocana (「輝かしいもの」) という語は、それぞれ動詞語根 vās (「音を立てる」) と動詞語根 roc (「輝く」) の後に A 3.1.134 により Lyu が導入されて派生する。そして、(2-1d) ramaṇāni

¹⁹恋人 (シーター) がいるときは、甘い鳴き声に聞こえていたということである (JM on BhK 6.75 [122.17]: dayitāyām satyām madhurapralāpam āsīd ity arthaḥ)。マツリナータは詩節の趣意を次のように説明する。SP on BhK 6.75 (I.188.12–13): yat pūrvam priyāsahacarasya me sukhāvahaṃ tat sarvam idānīm asahyaṃ jātam iti tātparyam / (「以前、恋人 (シーター) と一緒にいる私に幸福を与えていたものは、今や全て耐え難きものとなった。これが趣旨である」)

次の先行訳は当該詩節の要点を得ていない。Leonardi 1972: 50.19–21: “Hamsa-birds and kokilas are always delightfully full-sounding when they are under the sway of their mistresses: this is the reason why they become hoarse when their mistress pars from them.”; M. A. Karandikar/S. Karandikar 1982: 76.16–18: “Every where pleasurable is very clearly dependent on the beloved, since the flock of swans and cuckoos has been croaking harsh at the departure of their beloveds”.

²⁰vu には A 7.1.1 yuvor anākau により aka が代置される。IT と呼ばれる指標辞である Ṇ 音と L 音には、A 1.3.9 tasya lopaḥ によりゼロが代置される。以下も同様である。

²¹動詞語根 as は現在時に近い未来時に属する行為を表示する。次の規則を見よ。A 3.3.131 var-tamānasāmīpye vartamānavad vā // (「行為が現在から近い過去または近い未来に属する場合、その行為を表示する動詞語根の後に、行為が現在に属する場合に起こる接辞と同様の接辞が任意に起こる」)

²²Lyu の yu 音には A 7.1.1 yuvor anākau により ana が代置される。

vanaukasām（「森の住人達を魅了する[森]」）における ramaṇa（「魅了するもの」）は、NiCで終わる動詞語根 ram（「魅了する」）の後に A 3.1.134 により Lyu が導入されて派生する語である。以上見た動詞語根 nand、vaś、ruc、ram は nand 群（gaṇapāṭha 128）に含まれる動詞語根である²³。

興味深いことに、*Siddhāntakaumudī* が動詞語根 vaś を nand 群に含める一方で（SK [715.24–25]）、*Kāśikāvṛtti* はそれを含めない。後者はその代わりに動詞語根 vās（「香りをつける」）を含め、その後に A 3.1.134 により Lyu が導入された派生形として vāsana（「香りをつけるもの」）を挙げる（KV on A 3.1.134 [I.207.1]）。(2-1b) より判断して、バツティが知っていた nand 群は動詞語根 vas ではなく vaś を含めるものであったと考えられる。バツティの時代において既に gaṇapāṭha の異なる伝承が存在していたことを示唆する証拠である。

(2-2a) *udbhāsini*（「光彩を放つ[蓮達]」）と (2-2b) *paribhāvīni tāraṇām*（「星々を侮蔑する[蓮達]」）における *udbhāsin*（「光彩を放つもの」）と *paribhāvin*（「侮蔑するもの」）は、それぞれ *ud-bhū*（「輝く」）と *pari-bhū*（「侮蔑する」）の後に A 3.1.134 により *kr̥t* 接辞 *NinI* が導入されて派生する語であり、両動詞語根は *grah* 群（gaṇapāṭha 83）に含まれる。(2-2c) *manthīni cetasām*（「[人々の]心を掻き乱す[蓮達]」）という表現には若干の考察を加えておきたい。当該表現における *manthin*（「掻き乱すもの」）を説明する際、注釈者 *ジャヤマンガラ*（*Jayamaṅgala*、7世紀–11世紀頃）と *マツリナータ*（*Mallinātha*、15世紀頃）は動詞語根 *manth*（「掻き乱す」）を A 3.1.134 が指定する *grah* 群に含め、*manthin* を同規則に基づく *NinI* で終わる項目とする²⁴。しかし、現在伝わる gaṇapāṭha が指定する *grah* 群に動詞語根 *manth* は含まれない。BhK 6.74b における *manthin* という語の使用に関して以下の三つを可能性を想定できる。

1. *manthin* はそもそも A 3.1.134 の例証を意図したものではない。
2. バツティは動詞語根 *manth* を含む *grah* 群を知っていた。
3. バツティは *grah* 群を典型群（*ākṛtigaṇa*）と見なし²⁵、同群には含まれない *manth* にも A 3.1.134 を適用した。

いずれも同程度に可であり、現段階でバツティの真意を確定することは難しい。ここでは注釈者達の説明を考慮に入れ、2の解釈をとりたい。

(2-3) *kadvadam*（「不快に鳴くもの」）という複合語の後続要素 *vada*（「鳴くもの」）は²⁶、*pac* 群（gaṇapāṭha 133）に含まれる動詞語根 *vad*（「音を立てる」）の後に A 3.1.134 により *kr̥t* 接辞 *aC* が導入されて派生する語である。

3.2 BhK 6.76 → A 3.1.135–136

BhK 6.76: *pakṣibhir* (3a) *vitṛdair yūnām śākhībhiḥ* (3a) *kusumotkiraiḥ* /

²³nand 群、*grah* 群、*pac* 群の動詞語根は、*dhātupāṭha* ではなく *gaṇapāṭha* において提示される。KV on A 3.1.134 (I.206.18–19): *nandigrāhipacādayaś ca na dhātupāṭhataḥ sanniviṣṭā grhyante / kimtarhi nandana ramaṇa ityevamādiṣu prātipadikagaṇeṣu apoddhr̥tya prakṛtayo nirdīśyante* /（「nand 群、*grah* 群、*pac* 群は、*dhātupāṭhata* からはひとまとまりのものとして把握されない。そうではなくて、[パーニニは] *nandana*、*ramaṇa* というこのような類の名詞語基群において、[動詞語根を] 抽出した上で [その] 語基を教示している」）*gaṇapāṭha* に提示される語群については Cardona 1997: pars. 202–203; 205–206 を見よ。

²⁴JM on BhK 8.74 (122.10); SP on BhK 8.74 (I.188.1).

²⁵パーニニ文法家によれば *gaṇapāṭha* が挙げる語群（*gaṇa*）には二種ある。成員が余すところなく列挙される（*parigaṇana*）語群と代表例（*ākṛti*）だけが列挙される語群である。Cardona 1997: par. 204 を見よ。

²⁶当該の複合語は *kusitam vadatīti kadvadam* と分析される（SP on BhK [I.188.10–11]）。*ku* と *vada* が A 2.2.18 *kugatiprādayaḥ* により複合語を形成するとき、A 6.3.102 *rathavadayoś ca* により *ku* には *kat* が代置される。

(3b) ajño yo yasya vā nāsti (3c) priyo (4) praglo bhaven na saḥ //

「[感官対象の味を] 知らない者が恋人のいない者は、若者達 [の心] を傷つける鳥達や樹々—それは花々を降らせる—によって弱り果てることがないのである²⁷」

(3) A 3.1.135 igupadhajñāpṛkirah kaḥ //

「iK を最終音の直前音とする動詞語根と、jñā (「認識する」)、pṛi (「喜ばせる」)、kṛ (「ばらまく」) という動詞語根の後に、kṛt 接辞 Ka が起こる」

[解説] (3a) vitṛdaiḥ yūnām (「若者達 [の心] を傷つける [鳥達や樹々]」) における vitṛda (「傷つけるもの」)、(3b) の ajā (「[感官対象の味を] 知らない者」)、(3c) の priya (「喜ばせる者、すなわち恋人」)、そして (3d) kusumotkira (「花を降らせる [樹]」) における utkira (「降らせるもの」) は、それぞれ vi-ṛd²⁸、jñā、pṛi、ud-kṛ の後に A 3.1.135 により kṛt 接辞 Ka が導入されて派生する語である。

(4) A 3.1.136 ātaś copasarge //

「upasarga が共起項目であるとき、ā 音で終わる動詞語根の後に kṛt 接辞 Ka が起こる」

[解説] (4) の pragla (「弱り果てる者」) という語は、upasarga である pra に先行される動詞語根 glai (「弱る」) の後に A 3.1.136 により Ka が導入されて派生する。なお、glai の ai 音には A 6.1.45 ād eca upadeśe 'siti により ā 音が代置される (glai → glā)²⁹。したがって、それを「ā 音で終わる動詞語根」と見なすことが可能である³⁰。このようにして、glai に対する A 3.1.136 の適用条件が確保される。

3.3 BhK 6.77 → A 3.1.137

BhK 6.77: dhvanīnām (5b) uddhamair ebhir madhūnām (5c) uddhayair bhṛśam /

(5a) ājighraiḥ puṣpagandhānām pataṅgair glapitā vayam //

「羽音を立てながらしきりに花蜜を吸い、花香を嗅いでいるこの蜂達は、我々を苦しめる」³¹

(5) A 3.1.137 pāghrādhmādhedṛśaḥ śaḥ //

「upasarga が共起項目であるとき、動詞語根 pā (「飲む」)、ghrā (「嗅ぐ」)、dhmā (「音を生み出す、吹く、煽る」)、dheṭ (「飲む」)、dṛś (「見る」) の後に kṛt 接辞 Śa が起こる」

[解説] (5a) ājighraiḥ puṣpagandhānām (「花香を嗅ぐ [蜂達]」) における ājighra (「嗅ぐもの」)、(5b) dhvanīnām uddhamaiḥ (「羽音を立てる [蜂達]」) における uddhama (「生み出すもの」)、(5c) madhūnām uddhayaiḥ (「花蜜を吸う [蜂達]」) における uddhaya (「飲むもの」) は、それぞれ lā-ghrā、ud-dhmā、ud-dhe の後に A 3.1.137 により kṛt 接辞 Śa が導入さ

²⁷Leonardi 1972: 50.23 が priya に対してあてる訳語 “a friend” は文脈上不適切である。

²⁸ṛd は iK (ここでは r 音) を最終音の直前音 (upadhā) とする動詞語根である。

²⁹A 6.1.45 ād eca upadeśe 'siti // (「教示の段階で eC で終わる動詞語根、その最終音に ā 音が代置される。SIT である接辞が後続する場合には代置されない」)

³⁰ここで想起されるべきは次の解釈規則である。PIŚ 37: ekadeśavikṛtam ananyavat // (「項目 x の部分に関して変容した項目 y は、項目 x と異なるものとして扱われる」) glai は glā に変形しても動詞語根たる資格を失わない。

³¹Leonardi 1972: 51.1–2 は詩節 d 句の glapitā vayam を “they make us very drowsy” と訳す。しかし、当該詩節が、シーターへの思いをかき立てる蜂達によりラーマ達の心が苦しめられる様を描くものであることは明らかである。蜂達により彼らが眠気を誘われているわけではない。

れて派生する語である。Śa 接辞が後続するとき、動詞語根 ghrā と dhmā には A 7.3.78 pāghrādhmāsthāmnādāṅdrśyarttiśadasadām pibajighradhamatiṣṭhāmanayacchapaśyarcchadhauśīyasīdāḥ によりそれぞれ jighr と dham が³²代置され (ā + ghrā + Śa → ā + jighr + a; ud + dhmā + Śa → ud + dham + a) ³²、動詞語根 dhe の e 音には A 6.1.78 eco 'yavāyāvah により ay が代置される (ud + dhe + Śa → ud + dhay + a) ³³。

なお、Kāsikāvṛtti は、A 3.1.136 から A 3.1.137 に upasarge (「upasarga が共起項目であるとき」) を読み込まない者達の解釈に言及する³⁴。Siddhāntakamudī は upasarge を読み込まず、jighra (「嗅ぐ者」)、dhama (「吹く者」)、dhaya (「飲む者」) 等を適用例として挙げる (SK 2899 [489.8])。パッティが Kāsikāvṛtti と同様、upasarge を読み込んで A 3.1.137 を解釈していることは、上に見た (5a)(5b)(5c) に明らかである。

3.4 BhK 6.78–79 → A 3.1.138–140

BhK 6.78: (6b)dhārayaiḥ kusumormīṇāṃ (6c)pārayair bādhituṃ janān /
śākhibhir hā hatā³⁵ bhūyo hṛdayānām (6d)udejayaiḥ //

「一連の花を咲かせているがため、[愛する者と別離する] 人々を苦しめることができ、心の動揺を誘う樹々は、ああ、我らを酷く傷つける」

BhK 6.79: (7a)dadair duḥkhasya māṅgbhyo (7b)dhāyair āmodam uttamam /
(6a)limpair iva tanor vātaiś (6e)cetayaḥ syāj (8)jvalo na kaḥ //

「至高の芳香を持ちつつ [人の] 体を塗るかのように [吹くことで]、[恋人と別離する] 私のような者に苦しみを与える風によって、[悲しみの炎に] 焼かれない人がいようか」

(6) A 3.1.138 anupasargāl limpavindadhāripārivedyudejicetisāṣihibhyaś ca //

「upasarga に先行されない以下の動詞語根の後に kṛt 接辞 Śa が起こる。1. tud 群の動詞語根 lip (「塗る」) と vid (「得る」) ³⁶、2. NiC で終わる bhū 群 / tud 群の動詞語根 dhr (「持たせる / 支える」)、3. NiC で終わる hu 群または krī 群の動詞語根 pī (「いっぱいにさせる、守らせる」) あるいは cur 群の動詞語根 pār (「完了する、～できる」) ³⁷、4. NiC で終わる ad 群の動詞語根 vid (「認識させる」)、NiC で終わる div 群の動詞語根 vid (「存在させる」)、NiC で

³²A 7.3.78 pāghrādhmāsthāmnādāṅdrśyarttiśadasadām pibajighradhamatiṣṭhāmanayacchapaśyarcchadhauśīyasīdāḥ // (「ŚIT である接辞が後続するとき、āṅga である動詞語根 pā (「飲む」)、ghrā (「嗅ぐ」)、dhmā (「音を立てる、吹く、煽る」)、sthā (「留まる」)、mnā (「繰り返す」)、dā (「与える」)、drś (「見る」)、r (「行く、到達させる」)、sr (「進む」)、śad (「衰退する」)、sad (「座る、崩壊する、進む、沈み込む」) 全体にそれぞれ pib、jighr、dham、tiṣṭh、man、yacch、paśy、rcch、dhau、śīy、sīd が代置される)

³³A 6.1.78 eco 'yavāyāvah // (「音の接続の領域で、母音が後続するとき、eC にそれぞれ ay、av、āy、āv が代置される」)

³⁴KV on A 3.1.137 (I.208.3): upasarge iti kecin nānuvartayanti / paśyati iti paśya [read: paśyaḥ] /

³⁵マッリナータは hato (「[樹々は] 私を傷つける」) と読む。直前の BhK 6.77 で vayam という人称代名詞が使用されていることを理由に、ジャヤマンガラを読みを採用する。

³⁶規則中に提示される limp と vind はそれぞれ lip と vid に nUM が付加された形である。A 7.1.59 śe mucādīnām は、Śa 接辞が後続するとき、muc 群の動詞語根が付加辞 nUM をとることを規定する。パーニニは、limp と vind という語形を提示することで、A 3.1.138 の適用対象は、A 7.1.59 の適用対象である tud 群 (muc 群に含まれる) の lip と vid だけであることを知らしめている。BM on SK 2900 (IV.39.11–12): sūtre kṛtanumau limpavindau nirdiṣṭau / atas taudādikayor eva grahaṇam /

³⁷Nyāsa on KV to A 3.1.138 (II.531.26–27): pāra tīra karmasamāptau curādīḥ / atha vā pī pālanapūraṇayoḥ iti hetumaññijantaḥ /

終わる tud 群の動詞語根 vid (「得させる」)、NiC で終わる rudh 群の動詞語根 vid (「考察させる」)、または cur 群の動詞語根 vid (「話す、住む、感じる」)³⁸、5. ud に先行された、NiC で終わる bhū 群の動詞語根 ej (「震わす」)、6. cur 群の動詞語根 cit (「意思する」)³⁹、7. NiC で終わる動詞語根 sat (「喜ばす」)⁴⁰、8. NiC で終わる bhū 群の動詞語根 sah (「耐えさせる」) または cur 群の動詞語根 sah (「耐える」)⁴¹

[解説] (6a) の limpaiḥ iva tanoḥ (「体を塗るかのように吹く [風]」) における limpā (「塗るもの」)、(6b) dhārayaiḥ kusumormiṇām (「一連の花を持つ [樹々]」) における dhāraya (「持つもの、支えるもの」)、(6c) pārayaiḥ bādhitum janān (「人々を苦しめることができる [樹々]」) における pāraya (「～できるもの」)、(6d) hr̥dayānam udejayaiḥ (「心を震わす [樹々]」) における udejaya (「震わすもの」)、そして (6e) の cetaya (「意思する者、すなわち人」) は、それぞれ動詞語根 lip、使役接辞 NiC で終わる tud 群の動詞語根 dhr̥⁴²、cur 群の動詞語根 pār⁴³、使役接辞 NiC で終わる ud-ej、cur 群の動詞語根 cit の後に、A 3.1.138 により kṛt 接辞 Śa が導入されて派生する語である。

(7) A 3.1.139 dadātīdadhātyor vibhāṣā //

「upasarga に先行されない動詞語根 dā (「与える」) と dhā (「保持する、支える」) の後に kṛt 接辞 Śa が任意に起こる」

[解説] (7a) dadaiḥ duḥkhasya (「苦しみを与える [風]」) における dada (「与えるもの」) という語は、動詞語根 dā の後に A 3.1.139 により kṛt 接辞 Śa が導入されて派生する⁴⁴。同様に動詞語根 dhā の後に Śa が当該規則により導入される場合、dadha (「保持するもの、支えるもの」) という語が派生する。一方、A 3.1.139 による Śa の導入は任意であるから、それが導入されない場合には、本論 3.5 で見る A 3.1.141 が規定する kṛt 接辞 Na が A 3.1.139 により導入される。その結果、dhāya という語形が派生する (dhā + Na → dhā + yUK + a → dhāya)⁴⁵。(7b) dhāyaiḥ āmodam (「芳香を持つ [風]」) において、Na で終わる dhāya という語により A 3.1.139 の文法操作の一つが例証される。

なお、上記 (7b) は文法的な問題を孕む。次の規則を見よ。

A 2.3.65 kartṛkarmaṇoḥ kṛti //

³⁸Nyāsa on KV to A 3.1.138 (II.531.27–28): vida vedanākyhānanivāseṣu / curādīṇyantaḥ / atha vā—jñānādyarthhānām vidādīnām anyatamo hetumaṇṇyantaḥ /

³⁹Nyāsa on KV to A 3.1.138 (II.531.29): citī samjñāne / curādīṇyantaḥ /

⁴⁰当該の動詞語根 sat は dhātupāṭha には挙げられていない。それは当該規則が直接挙げる動詞語根 (sautra) である。SK 2900 (489.15): sātīḥ sukhārthaḥ sautro hetumaṇṇyantaḥ /

⁴¹Nyāsa on KV to A 3.1.138 (II.531.29–30): śaha maṣaṇe hetumaṇṇyantaḥ / curādīṇyanto vā /

⁴²A 3.1.138 は bhū 群と tud 群の動詞語根 dhr̥ の後に Śa 接辞が起こることを規定する (BM on SK 2900 [IV.39.11–12]: dhr̥ñ dhāraṇe dhr̥ñ avasthāne ābhyām hetumaṇṇyantābhyām śaḥ)。bhū 群の動詞語根 dhr̥ (「支える、持つ」) の後に Śa が起こる場合、「[自分を] 支えさせる者、すなわち負債者」を意味する dhāraya という語が派生する。一方、tud 群の動詞語根 dhr̥ (「存立する」) の後に Śa が起こる場合、その派生形 dhāraya は「存立させる者、すなわち支える者、持つ者」を意味する。パツティが使用する dhāraya は後者である。

⁴³cur 群の動詞語根の後には A 3.1.25 satyāpāpāsarūpavīṇātūlaślokaśenāomatvacavarmavarnaḥ curādībhyo nic により無条件に NiC 接辞が導入される。同接辞は、A 3.1.26 hetumati ca が導入を規定する使役接辞 NiC とは異なる点に留意されたい。

⁴⁴dada という語形の派生を概略を述べておこう。Śa 接辞には A 3.4.113 tinśit sāravadhātukam により術語 sāravadhātuka が適用される。(行為主体) を表示する sāravadhātuka である Śa が後続するとき、動詞語根 dā の後に A 3.1.68 kartari śap により vikaraṇa 接辞 ŚaP が起こる。hu 群の動詞語根である dā に後続する ŚaP には A 2.4.75 juhotyādibhyah śluḥ によりゼロ (Ślu) が代置される。Ślu の後続を根拠として A 6.1.10 ślau により音素重複が起こる。dadha の場合も同様である。

⁴⁵KV on A 3.1.139 (I.208.16): ṇasyāpavādaḥ / dadaḥ dāyaḥ / dadhaḥ dhāyaḥ; SK 2901 (489.3–4): śaḥ syāt / dadaḥ / dadhaḥ / pakṣe vakṣyamāṇo ṇaḥ / なお、yUK の付加は A 7.3.33 āto yuk cinṅkṛtoḥ により規定される。

「kṛt 接辞で終わる項目が使用される場合、他の項目によって表示されていない〈行為主体〉または〈目的〉が表示されるべきときに、その kṛt 接辞で終わる項目と結びつく項目 x の後に第六格接辞が起こる」

上述したように dhāya は kṛt 接辞 Na で終わる語である。そして、「芳香」(āmoda) は同語が表示する保持行為に対する〈目的〉(karman) である。したがって、A 2.3.2 karmaṇi dviṭiyā の例外規則である A 2.3.65 に従い、〈目的〉を表示する第六格接辞が āmoda という語の後に導入された dhāyair āmodasya という表現が使用されるべきである。注釈者達は二通りの仕方でも (7b) の説明を試みる。

1. [マツリナータ] A 2.3.50 śaṣṭhī śeṣe から A 2.3.65 に śeṣe を読み込み、〈目的〉が〈残余〉(śeṣa) として意図されるときに A 2.3.65 が適用され、意図されないときには A 2.3.2 が適用されるとする⁴⁶。
2. [ジャヤマンガラ] A 2.3.65 による第六格接辞の導入を義務的でないもの (anitya) と見なし、A 2.3.2 による第二格接辞導入を許す⁴⁷。

まず解釈 1 について検討しよう。A 2.3.65 に śeṣe を読み込む場合、同規則は次のように解釈されることになる。

A 2.3.65 kartṛkarmaṇoḥ kṛti //

「kṛt 接辞で終わる項目が使用される場合、他の項目によって表示されていない〈行為主体〉または〈目的〉が〈残余〉として意図されるときに、その kṛt 接辞で終わる項目と結びつく項目 x の後に第六格接辞が起こる」

これによれば、「芳香」が〈目的〉として意図されるとき、〈残余〉、すなわち〈関係〉(sambandha) を表示する第六格接辞が A 2.3.65 により導入され (dhāyair āmodasya)、〈目的〉として意図されるとき、A 2.3.2 により第二格接辞が導入されることになる (dhāyair āmodam)。第六格形を用いるか第二格形を用いるかは話者の意図次第である。しかしながら、この解釈は A 2.3.65 中に karman という語を述べるパーニニの意図に反するものである。以下の三規則を見よ。

A 2.3.50 śaṣṭhī śeṣe //⁴⁸

A 2.3.52 adhīgarthadayeśān karmaṇi //⁴⁹

A 2.3.65 kartṛkarmaṇoḥ kṛti //

A 2.3.65 が A 2.3.52 と同様に śeṣa 論題に属するならば、パーニニは A 2.3.65 を *kartari ca kṛti とより少ない音節数で定式化したはずである。何故なら、ca 音により A 2.3.52 から A 2.3.65 に karmaṇi を継起 (anuvṛtti) させることができるからである。パーニニがそうはせず、kartṛkarmaṇoḥ kṛti というように karman という語を再度述べたのは、A

⁴⁶SP on BhK 6.79 (I.190.2-3): kartṛkarmaṇoḥ kṛti ity atra śeṣatvavivakṣāyām eva śaṣṭhīvidhānād iha tadavivakṣāyām āmodam iti karmaṇi dviṭiyā /

⁴⁷JM on BhK 6.80 (121.17-18): uttamam iti kriyāviśeṣaṇam uttamam āmodam dhāyaiḥ kusumānām parimalam dhārayadbhir iti vyākhyāne anityatvāt kṛtprayoḥ karmaśaṣṭhyabhāvah /

⁴⁸同規則は、〈残余〉である〈関係〉(sambandha) が表示されるべきときに、第六格接辞が起こることを規定する。

⁴⁹A 2.3.52 は、adhi-iK (「想起する」) と同じ意味を有する項目が表示する行為の〈目的〉、動詞語根 day (「与える、進む、守る、傷つける」) と iś (「支配する」) が表示する行為の〈目的〉、これらが〈残余〉として意図されるときに第六格接辞が起こることを規定する。

2.3.50 から A 2.3.52 に読み込まれる śeṣa が A 2.3.65 には読み込まれないことを示すためである⁵⁰。これが A 2.3.65 における karman の言明意図の伝統的解釈である⁵¹。

一方、解釈 2 に関して注目されるべきは次の規則である。

A 5.1.117 tad arham //

『「x を得るにふさわしいもの」(tad arham) という意味で、第二格接辞で終わる意味的連関項目の後に、taddhita 接辞 vatI が任意に起こる』⁵²

ここで重要なのは、パーニニが tat (「x を」) という第二格形を使用していることである。A 2.3.65 に従うならば、arha (「～を得るふさわしい」) という kṛt 接辞で終わる語 (arh + aC [← A 3.1.141]) と結びつくとき、〈目的〉を表示するためには第六格接辞が指示代名詞 tad の後に起こるべきである (*A 5.1.117 tasya arham)。興味深いことに、Tattvabodhini は、A 5.1.117 におけるこの第二格形の使用を A 2.3.65 による第六格接辞導入が義務的でないことを示す指標 (jñāpaka) と見なし、それを根拠にバッティの表現 (7b) を正当化する⁵³。パーニニ自身が tad arham という表現を使用している点及びその表現が実際に文法家達の間で議論されている点を考慮するならば、バッティが (7b) のような表現を許容した理由としては 1 よりも 2 の可能性が高いと考えられる。

(8) A 3.1.140 jvalitikasantebhyo ṇaḥ //

「upasarga に先行されない jval (「燃える、燃やす」) から kas (「行く」) までの動詞語根の後に kṛt 接辞 ṇa が任意に起こる」

[解説] A 3.1.140 は特定の動詞語根の後に kṛt 接辞 ṇa が任意に起こることを規定する。もし、ṇa が起こらない場合、本論 3.1 で見た A 3.1.134 が規定する aC が A 3.1.140 により導入される⁵⁴。(8) の jvala (「燃える者」) は動詞語根 jval の後にこの aC が導入されて派生する語である。NIT である ṇa が起こる場合には、A 7.2.116 ata upadhāyāḥ により jval の a 音に vṛddhi が代置され、jvala ではなく jvāla という語形が派生する⁵⁵。

⁵⁰KV on A 2.3.65 (I.148.21): śeṣa iti nivṛttam punaḥ karmagrahaṇāt / itarathā hi kartari ca kṛti ity evaṃ brūyāt /

⁵¹Nyāsa は次のように説明する。Nyāsa on KV to A 2.3.65 (II.225.31–226.26): itarathā hīti / yadi śeṣagrahaṇam anuvartata ity arthaḥ / kartari ca kṛtīty evaṃ brūyāt ity / evam api hy ucyaṃāne śeṣa ity anuvṛttau cakāraḥkaraṇāt karmaṇīty etal labhyata eva, kiṃ karmagrahaṇena / tasmāt punaḥ karmagrahaṇaṃ śeṣādḥikāranivṛtṭyartham / punaḥ karmagrahaṇena hi pūrvasya karmagrahaṇasya nivṛttir ākhyāyate / tannivṛttau tatsambaddham anuvṛttam api śeṣagrahaṇaṃ nivartate / (‘itarathā hi 以下について。もし śeṣa という語の言明が継起するならば、という意味である。kartari ca kṛtīty evaṃ brūyāt 以下について。実に、このように定式化した場合でも、śeṣa という語が継起するならば、ca 音を述べることで karmaṇi というこの語が必ず得られる。[それなのに] karman という語を述べて何になろう。それ故、karman という語を再度述べるのは śeṣa 論題を終了させるためである。実に、再度 karman という語が述べられることで、先行の [A 2.3.52 における] karman の言明は読み込まれないことが知らされる。その [A 2.3.52 における karman の言明が] 読み込まれないとき、それと関係する継起者である śeṣa の言明も [A 2.3.65 には] 読み込まれない))

⁵²Siddhāntakaumudī は例文として vidhim arhati vidhivat pūjyate (「規定にのっとって [x は] 崇められる」) を挙げる (SK 1780 [290.2–3])。

⁵³TB on SK 1780 (II.526.22–24): yady api kṛdyoge karmaṇi śaṣṭhyā bhavitavyam tathāpi atra sattro vibhaktivatyaya ity eke / kartṛkarmaṇoḥ—iti śaṣṭhyā anityatvajñāpakam idam / tena ca dhāyair āmodam uttamam iti bhāṭṭiprayogah samgacchata iti tu kārakeṣv avocāma / (「kṛt 接辞で終わる項目と結びつくときには [目的] を表示する第六格接辞が起こるべきであるが、ここでの名詞接辞の交替は [A 5.1.117 という] スートラ自体に基づく」とある者達は主張する。これは、A 2.3.65 kartṛkarmaṇoḥ 云々に基づく第六格接辞 [の導入] が義務的でないことを示唆する指標である。そしてそれを根拠として、我々はまさに『至高の花香を持つ [風] (dhāyair āmodam uttamam) というバッティの言語使用は適切なものである』と kāraḥka 論題において述べた))

⁵⁴dhātupāṭha I.884: jvālā dīptau から dhātupāṭha I.913: kāsā gatau までの動詞語根が A 3.1.140 の適用対象である。同規則は、pac 群の動詞語根の後に kṛt 接辞 aC の導入を規定する A 3.1.134 の例外規則 (apavāda) である。KV on A 3.1.140 (I.208.20): aco 'pavādaḥ; Nyāsa on KV to A 3.1.140 (II.533.28–29): jvalādīnām pacādyantahpātītvāt /

⁵⁵A 7.2.116 は、NIT または NIT である接辞が後続するとき、āṅga の最終音の直前音 a に vṛddhi が代置されることを規定する。

3.5 BhK 6.80–82 → A 3.1.141–142

BhK 6.80: ^(9a–b)avaśyāyakaṅśrāvās cārumuktāphalatviṣaḥ /

kurvanti ^(9c)cittasaṃsrāvaṃ⁵⁶ calatparṇāgrasambhṛtāḥ //

「揺れ動く葉の先に溜まって流れ落ちる露の滴は、美しい真珠のような輝きを放ち、
[我らの]心を濡らす⁵⁷」

BhK 6.81: ^(9d)avasāyo bhaviṣyāmi duḥkhasyāsa kadā nv aham /

na ^(9e)jīvasyāvahāro⁵⁸ māṃ karoti sukhinaṃ yamaḥ //

「一体いつ私はこの苦しみを終わらせるのだろうか。命をとる者であるヤマ [も]私を
楽にしてくれない⁵⁹」

BhK 6.82: dahye 'haṃ madhuno ^(9f)lehair ^(10a)dāvair ugrair yathā giriḥ /

^(10b)nāyaḥ ko 'tra⁶⁰ sa yena syāṃ batāhaṃ vigatajvaraḥ //

「山が恐ろしい山火事で焼かれるように、私は花蜜をなめる [蜂達]に焼かれている。
ああ、ここで、私の熱病を治す方策として何かあるのだろうか」

(9) A 3.1.141 śyādvadhāsrusaṃsravatīṇavasāvahrīhaśliṣaśvasaś ca //

「動詞語根śyai(「行く」)、āを最終要素とする動詞語根、動詞語根vyadh(「突き通す」)、ā-sru(「流れる」)、sam-sru(「流れる」)、ati-i(「越える」)、ava-so(「終わらせる」)、ava-hṛ(「とる」)、lih(「なめる」)、śliṣ(「抱く」)、śvas(「息をする」)の後にkṛt接辞Naが起こる⁶¹」

[解説] (9a-b) avaśyāyakaṅśrāvāḥ(「流れ落ちる露の滴」)におけるavaśyāya(「下に落ちるもの、すなわち露」)とāsrāva(「流れるもの」)、(9c) cittasaṃsrāvaṃ(「流れる心、すなわち[悲しみに]濡れる心」)におけるsaṃsrāva(「流れるもの」)、(9d) avasāyaḥ . . . duḥkhasya(「苦しみを終わらせる[ラーマ]」)におけるavasāya(「終わらせる者」)、(9e) jīvasya avahāraḥ(「命をとる者」)におけるavahāra(「とる者」)、そして(9f) madhunaḥ lehaiḥ(「蜜をなめる[蜂達]」)におけるleha(「なめるもの」)は、それぞれava-śyai、ā-sru、sam-sru、ava-so、ava-hṛ、lihの後にA 3.1.141によりkṛt接辞Naが導入されて派生する語である。

(10) A 3.1.142 dūnyor anupasarge //

「upasargaに先行されないとき、動詞語根du(「燃やす」)とnī(「導く」)の後にkṛt接辞Naが起こる」

[解説] (10a)のdāva(「燃やすもの、すなわち火事」)と(10b)のnāya(「導くもの、すなわち方策」という語は、それぞれ動詞語根duとnīの後にA 3.1.142によりkṛt接辞Naが導入されて派生する。

⁵⁶マッリナータはcittam saṃsrāvaṃと読む。意味は変わらない。

⁵⁷真珠のように美しい露の滴は、シーターが身に付けていた首飾りの真珠をラーマに思い出させ、心の動揺を誘う。JM on BhK 6.80 (124.1–2): sitāhārasthamuktāphalāni smārayantīty arthaḥ /

⁵⁸マッリナータはjīvasyāpāhāroと読む。しかし、当該表現はA 3.1.141の例証を意図したものであるから、ジャヤマンガラの読みを採用すべきである。A 3.1.141の適用対象はava-hṛでありapa-hṛではない。マッリナータが後者を提示するA 3.1.141の読みを知っていた可能性はあるが、憶測の域を出ない。

⁵⁹このような苦しみを味わうくらいなら死んだ方がましなのに死ぬことすらできない、という意味である。SP on BhK 6.81 (I.190.21–22): asmad jīvanān maraṇam eva varam iti bhāvāḥ /

⁶⁰マッリナータはko nuと読む。

⁶¹規則中で提示されるśyāとsoは、それぞれ動詞語根śyai(dhātupāṭha I.1012: śyaiṅ gatau)とso(dhātupāṭha IV.39: śo antakarmanī)の最終音にA 6.1.45 ād eca upadeśe 'sitiによりā音が代置された語形である。

3.6 BhK 6.83 → A 3.1.143–144

BhK 6.83: samāviṣṭam (11a) grāheṇa (11b) grāheṇvāttam arṇave /
dr̥ṣṭvā (12) gr̥hān smarasyeva vanāntān mama mānasam //

「カーマ神の住居のような森の一角を見ると、我が心が [不吉な] 惑星に打ちのめされたか、大海にいる鰐に捕らえられたかのように感じる」

(11) A 3.1.143 vibhāṣā grahaḥ //

「動詞語根 *grah* (「つかむ」) の後に *kṛt* 接辞 *Ṇa* が任意に起こる」

[解説] (11b) *grāheṇa iva āttam* (「鰐に捕らえられたかのような [心]」) における *grāha* (「[生物を] 捕まえる者、すなわち鰐」) という語は⁶²、動詞語根 *grah* の後に A 3.1.143 により *kṛt* 接辞 *Ṇa* が導入されて派生する。一方、(11a) *samāviṣṭam graheṇa iva* (「[不吉な] 惑星に打ちのめされたかのような [心]」) における *graha* (「[特定の進み方を] するもの、すなわち惑星」) は⁶³、*Ṇa* が導入されない場合に、本論 3.1 で見た A 3.1.134 が規定する *aC* が A 3.1.143 により導入されて派生する語である。*Ṇa* が起こるときには語形が *grāha* となり、*aC* が起こるときには *graha* となるのは、前者の場合には、*NIT* 接辞後続を適用根拠とする A 7.2.116 *ata upadhāyāḥ* に基づいて *grah* の *a* 音に *vṛddhi* が代置されるからである。BhK 6.83 では、A 3.1.143 により *Ṇa* が導入される場合と *aC* が導入される場合の両方の例が示されている。

なお、A 7.4.41 *śacchor anyatarasyām* に対する *Bhāṣya* が明示するように、A 3.1.143 が言及する任意性 (*vibhāṣā*) は、認められる領域が制限される限定的任意性 (*vyavasthitavibhāṣā*) である⁶⁴。*Kāśikāvṛtti* 及び *Siddhāntakaumudī* によれば、水生生物 (*jalacara*) を意味するときには必ず *Ṇa* が導入される一方、天体 (*jyotis*) を意味するときには必ず *aC* が導入される⁶⁵。バッティが使用する (11b) と (11a) は、このような伝統的解釈に沿うものである。

(12) A 3.1.144 *gehe kaḥ //*

「家である〈行為主体〉が表示されるべきとき⁶⁶、動詞語根 *grah* (「つかむ」) の後に *kṛt* 接辞 *Ka* が起こる」

[解説] (12) *dr̥ṣṭvā gr̥hān* (「住居 [のような森の一角] を目にする」と) における *gr̥ha* (「つかむもの、すなわち家」) という語は⁶⁷、動詞語根 *grah* の後に A 3.1.144 により

⁶²APV on *Amarakośa* 1.12.22a (169.24): *gr̥hñāti na muñcati prāṇina iti grāhaḥ /*

⁶³ŚKD (374.43): *gr̥hñāti gativiśeṣān iti /*

⁶⁴BM on SK 2905 (IV.41.18–19): *vyavasthitavibhāṣeyam iti / idam śacchoh iti sūtre bhāṣye spaṣṭam /*

パタンジャリは A 7.4.41 に対する *Bhāṣya* において次のような詩節を引用する。MBh on vt. 1 to A 7.4.41 (III.350.10–11): *devatrāto galo grāha itiyoge ca sadvidhiḥ / mithas te na vibhāṣyante gavākṣaḥ samśitavrataḥ /* ここには、限定的任意性が読み込まれる規則の適用例が提示されている。当該詩節の内容について本稿では詳論しない。Joshi/Roodbergen 2007: 74–75 を見よ。重要なのは、同詩節が、A 3.1.143 が言及する任意性が限定的任意性であることを明示していることである (*grāhaḥ . . . te na vibhāṣyante*)。

⁶⁵KV on A 3.1.143 (I.209.10–11): *acaḥ apavādaḥ / grāhaḥ grahaḥ / vyavasthitavibhāṣā ceyam / jalacare nityam grāhaḥ / jyotiṣi neṣyate / tatra grahaḥ eva; SK 2905 (490.7–8): pakṣe 'c / vyavasthitavibhāṣeyam / tena jalacare grāhaḥ / jyotiṣi grahaḥ /*

⁶⁶*geha* という語の表示対象「家」は、*kṛt* 接辞の意味である〈行為主体〉の限定要素 (*upādhi*) である。*geha* という語は *upapada* 項目ではない。*Nyāsa* on KV to A 3.1.144 (II.535.29–30): *gehe kartarīti / etena gehe iti pratyaṅarthasya kartur upādhir iyam, na tūpapadam iti darśayati /*

⁶⁷*gr̥ha* に関しては多様な語義解釈が可能である。*Amarakośa* に対する注釈書の一つ *Amarapadavivṛti* は「入ってくる者達をつかむもの(受け入れるもの)」(*gr̥hñanti praviṣṭān iti gr̥hān*) と説明する (APV on *Amarakośa* 2.2.4c [197.19])。一方、*Siddhāntakaumudī* は「穀物等をつかむもの(穀物等を保存する場所)」(*gr̥hñāti dhānyādikam iti gṛham*) という説明を与える (SK 2906 [490.12])。

kṛt 接辞 Ka が導入されて派生する⁶⁸。

3.7 BhK 6.84 → A 3.1.145–147

BhK 6.84: vātāhatalacchākhā⁶⁹ (13)nartakā iva śākhinaḥ /
duḥsahā hī⁷⁰ parikṣiptāḥ kvaṇadbhir (14)aligāthakaiḥ //

「風に打たれて揺れ動く [手のような] 枝を持ち、羽音を立てる歌手のような蜂達に
囲まれた、踊り子のような樹々は、ああ、[我らには] 耐え難い」

(13) A 3.1.145 śilpini ṣvun //

「専門家である〈行為主体〉が表示されるべきとき⁷¹、動詞語根の後に kṛt 接辞ṣvuN が起
こる」

[解説] A 3.1.145 は規則の適用対象となる動詞語根を特定しない。これに対し、パタ
ンジャリは適用動詞語根の完全枚挙 (parigaṇana) を提案する。

MBh on A 3.1.145 (II.92.20): nṛtikhanirañjibhya iti vaktavyam /

「動詞語根 nṛt (「踊る」)、khan (「掘る」)、rañj (「染める」) の後に」と述
べられるべきである⁷²。

これにより、A 3.1.145 の適用対象となる動詞語根が nṛt、khan、rañj に制限される⁷³。
(13) nartakāḥ iva śākhinaḥ (「踊り子のような樹々」) における nartaka (「踊り子」) と
いう語は、動詞語根 nṛt の後に A 3.1.145 により kṛt 接辞ṣvuN が導入されて派生する。
バッティが上記パタンジャリの言明を念頭に置いていることは明らかであろう⁷⁴。

(14) A 3.1.146 gas thakan //

⁶⁸grah に KIT である Ka 接辞が後続するとき、A 6.1.16 grahijyāvayivyadhivaṣṭivativāṣṭiṣcatipṛcchatibhrjjanān
ṇiti ca により grah の r 音には samprasāraṇa である r̄音が代置される。そして、r̄音とそれに後続する a 音の両
者に A 6.1.108 samprasāraṇāc ca により r̄音が代置されて、gr̄ha という語形が派生する。grah + Ka → gr̄ah +
a → gr̄h + a → gr̄ha.

⁶⁹マリナータは vātāhatalacchākhā と読む。意味に違いはない。

⁷⁰マッリナータは hā と読むが意味は同じである。

⁷¹śilpin という語は何らかの行為の熟練者を意味する (SK 2907 [490.14–15]: kriyākausalam ślipam tadvatī
kartari ṣvun syāt)。

⁷²Bālamānoramā は当該言明を vārttika と見なすが (BM on SK 2907 [IV.42.18]: vārttikam idam)、Kielhorn
版 (Abhyankar 1962–72) と Rohathak 版 (Vedavratā 1962–63) には nṛtikhanirañjibhyaḥ という vārttika は取
録されていない。一方、NSP 版 (Śāstri/Kudāla 1937) には収録されている。

⁷³なお Siddhāntakaumudī によれば、パタンジャリが A 3.1.145 の適用対象と認める動詞語根は実際には nṛt
と khan だけである。A 6.4.24 aniditām hala upadhāyāḥ kniti に対する Bhāṣya において、パタンジャリが、rajaka
(「洗濯屋」という語は A 3.1.145 に基づく ṣvuN でなく US 2.32 kvun śilpisañjñayor apūrvasyāpi に基づく
uṇādi 接辞 Kvun で終わる語であることを明示しているからである (MBh on vt. 5 to A 6.4.24 [III.175.6]: kita
evaite auṇādikāḥ)。SK 2907 (490.18–19): bhāṣyamate tu nṛtikhanibhyām eva ṣvun / rañjes tu kvun śilpisañjñayor
iti kvun /

⁷⁴Kāśikāvṛtti も上記言明を引用する (KV on A 3.1.145 [I.209.18]: nṛtikhanirañjibhyaḥ parigaṇanam kar-
tavyam)。もし、同書以後に Bhaṭṭikāvya が成立したと仮定するならば、バッティは Kāśikāvṛtti の説明に従っ
ただけであるとも考えることができる。両作品の前後関係を確定するのは難しいが、Kāśikāvṛtti 以前にバッ
ティがパーニニ文典の注釈 (vivarāṇa) を著したとする Nyāsa の記述は注目に値する (川村 2012: 85, note 4
を見よ)。この数少ない文献学的証拠を尊重し、本研究では Bhaṭṭikāvya の成立は Kāśikāvṛtti の成立以前と
いう立場をとる。

「専門家である〈行為主体〉が表示されるべきとき、動詞語根 *gai* (「歌う」) の後に *kr̥t* 接辞 *thakaN* が起こる」

[解説] (14) *aligāthakaiḥ* (「歌手のような蜂達」) における *gāthaka* (「歌手」) という語は、動詞語根 *gai* の後に A 3.1.146 により *kr̥t* 接辞 *thakaN* が導入されて派生する⁷⁵。

なお、パーニニは A 3.1.146 の次に以下のような規則を定式化している。

(15) A 3.1.147 *nyuṭ ca //*

「〈行為主体〉である専門家が表示されるべきとき、動詞語根 *gai* (「歌う」) の後に *kr̥t* 接辞 *Nyuṭ* も起こる」

しかし、バツティは同規則を例証しない。次節で見る BhK 6.85 では A 3.1.148 *haś ca vr̥hikālayoḥ* の例証に移っている。BhK 8.34 において *gāyana* (「歌手」) という語の使用例が見られることから、バツティが A 3.1.147 とそれに基づく派生形 *gāyana* (*gai* + *Nyuṭ*) を知っていたことに疑問の余地はない⁷⁶。何故バツティは BhK 6.71–86 において A 3.1.147 の例証を省略し得たのか。

この点に関して着目すべきは、A 3.1.147 の定式化目的である。A 3.1.146 と A 3.1.147 による *kr̥t* 接辞 *thakaN* と *Nyuṭ* 導入の意味条件は、いずれも「専門家である〈行為主体〉が表示されるべきとき」(*śilpini kartari*) であり、両接辞導入の対象となる動詞語根はいずれも *gai* である。したがって、パーニニは A 3.1.146 と A 3.1.147 をまとめた次のような規則を定式化できたはずである。

*A 3.1.146 *go nyuṭthakanau //*

「専門家である〈行為主体〉が表示されるべきとき、動詞語根 *gai* (「歌う」) の後に *kr̥t* 接辞 *thakaN* と *Nyuṭ* が起こる」

*A 3.1.146 は *thakaN* の導入と *Nyuṭ* の導入という二つの文法操作を規定する。ここで想起すべきは、既に Narang 1969: 94–96 によっても指摘されているように、バツティは一つの規則が複数の文法操作を規定するとき、操作適用の一例のみを提示することでその規則の例証を済ます場合がしばしばあることである。この点を考慮すると、A 3.1.147 例証省略の問題に関して次の可能性が想定される。すなわち、バツティは A 3.1.146 と A 3.1.147 を一対のもの、すなわち *A 3.1.146 と同価値のものを見なし、動詞語根 *gai* の後に *thakaN* を導入する文法操作を例証するれば事足りると考えたのである。

この仮説を支持する具体的証拠として、A 3.3.100 *kr̥ṇāḥ śa ca* が例証される BhK 7.70 を挙げよう。

BhK 7.70: *vrajyāvatiḥ niruddhākṣān vidyevānuṣṭhitakriyān /
niracikramad icchāto vānarāṁś caṅkramāvataḥ //*

優雅な足どりをした女性は、[手で] 目を隠すという [指示通りの] 行為をなしまつすぐに進めない猿達を、彼らの望み通り去らせた。ちょうど [真言の] 知識が祭式行為を實踐した人達に [彼らが望むものを] 得させるように。

A 3.3.100 *kr̥ṇāḥ śa ca //*

「女性形の領域で、動詞語根 *kr̥ṇ* (「なす」) の後に、*kr̥t* 接辞 *KyaP* に加えて *śa* も起こる」

⁷⁵*gai* の *ai* 音には A 6.1.45 *ād eca upadeśe 'siti* により *ā* 音が代置される。

⁷⁶BhK 8.34: *prādirkṣata no nr̥tyaṁ nāsūsṛṣata gāyanān / rāmaṁ susmūrśamāno 'sau kapir virahaduḥkhitam //* (「その猿 [ハヌーマット] は別離に苦しむラーマを思い出そうとしたので、踊りを見ようとせず、歌手達 [の歌] を聞くともしなかった」) なお、BhK 8.1–49 は A 1.3.12 *anudātānita ātmanepadam* から A 1.3.77 *vibhāṣopapadena pratīyamāne* までの *ātmanepada* 選択規則を例証する箇所である。

*A 3.1.146 と同様、A 3.3.100 は同じ条件下で同じ動詞語根の後に二種の *kṛt* 接辞が起こることを規定する。そのうち、詩節 b 句の表現 *anuṣṭhitakriyān*（「[指示通り] 行為をなした [猿達] / 祭祀行為を实践した人達」）における *kriyā*（「[祭祀] 行為」）という語により例証されるのは、動詞語根 *kr* の後に *kṛt* 接辞 *śa* を導入する文法操作である。これにより A 3.3.100 の例証は果たされるため、*kr* の後に *kṛt* 接辞 *KyaP* を導入する文法操作の例証は省略されている。

ちなみにパーニニ文法家達によれば、パーニニが*A 3.1.146 を定式化せず、A 3.1.146 と A 3.1.147 を別々に定式化 (*yogavibhāga*) したのは、*thakaN* と *Ṇyuṭ* のうち、後者だけを後続規則 A 3.1.148 *haś ca vr̥hikālayoḥ* に継起させるためである (KV on A 3.1.147 [I.210.5]: *yogavibhāgaḥ uttarārthaḥ*; KV on A 3.1.148 [I.210.7]: *cakāreṇa ṇyuṭ anukṛṣyate*)⁷⁷。

3.8 BhK 6.85 → A 3.1.148–149

BhK 6.85: ⁽¹⁶⁾*ekahāyanasāraṅgagatī raghukulottamau /*

⁽¹⁷⁾*lavakau śatruśaktīnām ṛṣyamūkam*⁷⁸ *agacchatām //*

巧みに敵の勢力をそぐラグ家の二人の最上者（ラーマとラクシュマナ）は、一歳の子象のような足取りで、リシャムカへやって来た。

(16) A 3.1.148 *haś ca vr̥hikālayoḥ //*

「米または時間である〈行為主体〉が表示されるべきとき、それぞれ動詞語根 *OhāK*（「捨てる」）と *OhāN*（「行く」）の後に *kṛt* 接辞 *Ṇyuṭ* が起こる」

[解説] A 3.1.148 は、捨てる行為を意味し *parasmaipada* をとる動詞語根 *hā* (*dhātupāṭha* III.8: *OhāK tyāge*) と進行行為を意味し *ātmanepada* をとる動詞語根 *hā* (*dhātupāṭha* III.7: *OhāN gatau*) の後に、米または時間である〈行為主体〉が表示されるべきときに *kṛt* 接辞 *Ṇyuṭ* が起こることを規定する⁷⁹。*Kāśīkāvṛtti* によれば、時間である〈行為主体〉が表示されるべきときには、進行を意味する動詞語根 *hā* の後に *Ṇyuṭ* が起こり、「季節ごとの」様相を帯びるもの、すなわち年 (*jihīte bhāvān*) を意味する *hāyana* という語が派生する⁸⁰。バッティの表現 (16) *ekahāyanasāraṅgagatī*（「一歳の子象のような足

⁷⁷*Nyāsa* は次のように述べる。*Nyāsa* on KV to A 3.1.147 (II.537.28–29): *uttaratra cakāreṇa ṇyuṭ evānuvṛttri yathā syāt thakano mā bhūdi iti / go ṇyutthakanau ity ekayoge thakann apy anukṛṣyeta /*（「後続規則 (A 3.1.148) における *ca* 音により *Ṇyuṭ* だけが継起すべきであり、*thakaN* は継起してはならない。このような目的で [規則が別々に定式化されている]。go *ṇyutthakanau* と一つの規則が定式化される場合、[*Ṇyuṭ* に加えて] *thakaN* も [後続規則に] 読み込まれるはずである」) *Bāḷamanoramā* も同様の説明を与える。BM on SK 2909 (IV.16.15–19): *cakāra uktasamuccaye / gāyater ṇyuṭ thakan ca ślpini kartari / . . . yady api gas thakan ṇyuṭ ca ity ekam eva sūtram ucitam tathāpi ṇyuṭ evottarasūtre anuvṛttyartho yogavibhāgaḥ /*（「*ca* 音は既言及項目との連結を意味する。専門家である〈行為主体〉が表示されるべきとき、動詞語根 *gai* の後に *Ṇyuṭ* と *thakaN* が起こる [という意味である]。gas thakan ṇyuṭ ca と一つだけのストラ [を定式化するの] が適切であるとしても、*Ṇyuṭ* だけを後続規則に継起させるために、規則が別々に定式化されている」)

⁷⁸マツリナータは *ṛṣyamūkam* と読む。意味に違いはない。

⁷⁹*parasmaipada* と *ātmanepada* の選択はそれぞれ A 1.3.78 *śeṣāt kartari parasmaipadam* と A 1.3.12 *anudāttaṇita ātmanepadam* に基づく。

⁸⁰KV on A 3.1.148 (I.210.8): *kāle—hāyanaḥ saṃvatsaraḥ / jihīte bhāvān iti kṛtvā / jihīte bhāvān* という分析文を解釈するにあたっては、次の *Amarapadavivṛti* による説明が参考になる。APV on *Amarakośa* 1.4.21b (85.13): *jahāti kramaṇa ṛtūn iti hāyanaḥ /*（「*hāyana* は、順番に季節を捨て去るもの (年) を意味する」) ただし、ここで *Amarapadavivṛti* が *parasmaipada* をとる *hā* を語基として想定している点に留意すべきである。

なお、*Ṇyuṭ* が *hā* に後続するとき、*Ṇyuṭ* の *yu* 音には A 7.1.1 *yuvor anākau* により *ana* が代置され、*hā* の最終音 *ā* には A 7.3.33 *āto yuk cīṅkrtoḥ* により *yUK* が付加される。

取りの〔ラーマとラクシュマナ〕)における hāyana は、その文法操作を例証するものである⁸¹。

(17) A 3.1.149 prusṛlvaḥ samabhihāre vun //

「x を巧みになす〈行為主体〉が表示されるべきとき、動詞語根 pru (「動く」)、sṛ (「進む」)、lū (「切る」) の後に kṛt 接辞 vuN が起こる」

[解説] パーニニ文法学において、一般的に samabhihāra という語は行為の反復 (paunaḥpunya) または行為の激しさ (bhṛśatva) を意味する⁸²。ナーゲーシャ (Nāgeśa, 17 世紀晩期–18 世紀) によれば、後者は全体性 (kārtsnyā) と同義である⁸³。この解釈は以下の Bhāṣya に基づいたものである。

MBh on A 3.1.22 (II.28.16–18): adhiśrayaṇodakāsecanatanāḍulāvapanaidhopa-
karṣaṇakriyāḥ / tāḥ kaścit kārtsnyena karoti kaścit akārtsnyena / yaḥ kārtsnyena
karoti sa ucyate pāpacyata iti / punaḥ punar vā pacati pāpacyata iti /

鍋を火の上に置く行為 (adhiśrayaṇa)、鍋に水を注ぐ行為 (udakāsecana)、鍋
に米を入れる行為 (tanāḍulāvapana)、燃料を補給する行為 (edhopakarṣaṇa)
[が部分的行為 (avayavakriyā)] である。ある人はそれら [部分的行為] を
全体的に (kārtsnyena) なし、ある人は部分的に (akārtsnyena) なす。[部分
的行為を] 全体的になす人が「彼は全体的に料理している」(pāpacyate) と
言われる。あるいは、何度も何度も [主要行為 (pradhānakriyā) である] 料
理行為をなす人が「彼は繰り返し料理している」(pāpacyate) と言われる⁸⁴。

一方、A 3.1.149 における samabhihāra という語からは、〈行為主体〉の行為実践の
巧みさ (sādhukāritva) が間接的に指示される⁸⁵。この間接的指示は、上述したように
samabhihāra という語が行為実践回数の多さ (行為実践の反復) を意味することに基
づく。同じ行為を繰り返し実践していれば、概してその行為に熟達することが経験さ
れるからである⁸⁶。A 3.1.149 における samabhihāra 解釈の根拠となるのは次のような
Bhāṣya の言明である。

MBh on vt. 1 to A 3.1.149 (II.93.3–4): prasṛlvaḥ sādhukāriṇi vun vidheyāḥ /
sakarḍ api yaḥ suṣṭhu karoti tatra yathā syād bahuśo 'pi yo duṣṭhu karoti tatra mā
bhūd iti /

⁸¹ マツリナータは *Kāśikāvṛti* の見解を踏襲する。SP on BhK (II.192.1–3): jihīte bhāvān iti hāyanaḥ
saṃvatsaraḥ / haś ca vṛhikālayoḥ iti jahāter jihīteś ca tantreṇopādānād yathāsaṃkhyam vṛhikālayor lyuṭpratyaye
(read: ṇyutpratyaye) yugāgamaḥ /

⁸² BM on SK 2147 (II.671.20): paunaḥpunyam bhṛśatvam ca kriyāsamabhihārah /

⁸³ LŚÍ on SK 2929 (II.268.36): bhṛśārthaḥ kārtsnyam /

⁸⁴ *Uddyota* on MBh to A 3.1.22 (III.76.24–25): samūharūpāyāḥ kriyāyāḥ kālabhedād bhedo 'pi sājātyāt saiva
punaḥ punar anuṣṭhīyati iti buddhyā paunaḥpunyam iti tātparyam / (「[部分的行為の] 集合体である行為には時
間に基づく差異があるとしても、[料理行為という] 同種の行為であることに基づいて、『その同じ [行為]
が繰り返し実践されている』という知が生じる。そのような知を根拠として [行為の] 反復 (paunaḥpunya)
[という考え] が成立する。これが [Bhāṣya の] 趣旨である」)

⁸⁵ KV on A 3.1.149 (I.210.11): samabhihāragrahaṇenātra sādhukāritvam lakṣyate; SK 2911 (490.9): samab-
hihāragrahaṇena sādhukāritvam lakṣyate /

⁸⁶ PM on KV to A 3.1.149 (II.538.16–18): yaś ca yam kriyām punaḥ punar anuṣṭhīyati tasya tatra prāyeṇa
kauśalam upajāyate / ataḥ prāyaśāhacaryāt sādhukāritvam lakṣyate / lakṣaṇayā tatra vartata ity arthaḥ / tena kim
siddham bhavātīty āha—sakarḍ api / (「そして、ある人がある行為を繰り返し実践するならば、概してその人
はその行為をなすのが巧みになる。これ故、[行為実践回数の] 多さとの接続に基づいて、[samabhihāra
という語により] 行為の巧みさが間接的に指示される。間接的指示に基づいてその [行為の巧みさの] 意味領
域で [vuN が] 起こる、という意味である。それにより何が成立するのかという問いに対して [*Kāśikāvṛti*
は sakṛd api 以下を述べている]」)

vuN は、x を巧みになす [〈行為主体〉] が表示されるべきとき、動詞語根 prū (「動く」)、sr (「進む」)、lū (「切る」) の後に導入されるべきである。

ある [〈行為主体〉] が一度でも [x を] 上手になすならば、そのような [〈行為主体〉] を表示するために [vuN] が起こるべきであり、ある [〈行為主体〉] が 何度やっても [x を] なすことが下手ならば、そのような [〈行為主体〉] を表示するために [vuN] が起こることはあつてはならない。このような目的がある。

ナーゲーシャによれば、この言明は A 3.1.149 中の samabhihāre を sādhu-kāriṇi に読み替えることを提案している (*A 3.1.149 prusr̥lvaḥ sādhu-kāriṇi vun) ⁸⁷。同言明を考慮してであろう、ボージャ (Bhoja、11 世紀前半) は自身の文典 *Sarasvatīkaṇṭhābharāṇa* において prulūnsr̥bhyah sādhu-kāriṇi vun という規則を定式化している (SKĀ 1.3.229)。

以上のような A 3.1.149 に対する伝統的解釈に従えば、バツティの表現 (17) lavakau śatruśaktinām は「巧みに敵の勢力をそぐ [ラーマとラクシュマナ]」と解されるべきである ⁸⁸。当該表現における lavaka (「巧みにそぐ者」) は、動詞語根 lū の後に A 3.1.149 により kṛt 接辞 vuN が導入されて派生する語である。

3.9 BhK 6.86 → A 3.1.150

BhK 6.86: tau vālipraṇidhī matvā sugrīvo 'cintayat kapiḥ /

bandhunā vigr̥hīto 'ham bhūyāsam ⁽¹⁸⁾jīvakaḥ katham //

猿スグリーヴァは、彼ら (ラーマとラクシュマナ) をヴァーリンの密偵だと考え、「親族と争っている私が、どうして生きたいと願うだろうか」と思った。

(18) A 3.1.150 āśiṣi ca //

「祈願が理解される時 ⁸⁹、動詞語根の後に kṛt 接辞 vuN が起こる」

[解説] パーニニ文法家達は A 3.1.150 の適用例として jīvakaḥ (jīv + vuN) と nandakaḥ (nand + vuN) を挙げる。それぞれ、jīvatāt (「彼が生きますように」) と nandāt (「彼が喜びますように」) と意味的に等価である ⁹⁰。すなわち jīvaka と nandaka という語は、生存行為と喜び行為の〈行為主体〉となることを誰かに願われている者を意味する ⁹¹。

⁸⁷ Uddyota on MBh to A 3.1.149 (III.219.19): samabhihāragrahaṇasthāne idaṃ kāryam ity arthaḥ /

⁸⁸ マリナータも次のように注釈する。SP on BhK 6.85 (I.192.5-6): prusr̥lvaḥ samabhihāre vun iti lunāteḥ samabhihāre lakṣaṇayā sādhu-kāritve vunpratyayaḥ /

Leonardi 1972: 51.23; M. A. Karandikar/S. Karandikar 1982: 27.77; Fallon 2009: 117.13 による先行訳には、lavaka という語から理解される〈行為主体〉の行為実践の巧みさが反映されていない。

⁸⁹ 祈願 (āśiṣi) とは懇願の一種 (prārthanāviśeṣaḥ) であり、行為を対象とする (kriyāviśaya)。そしてそれは、話者が持つ属性 (prayokṛ-dharma) である。KV on A 3.1.150 (I.210.15): āśiḥ prārthanāviśeṣaḥ / sa ceha kriyāviśayaḥ; SK 2912 (490.13): āśiḥ prayoktur dharmah /

なお、Kāśikāvṛtti は別の箇所では祈願を「未だ獲得されていない望ましい対象を獲得しようとする欲求」(KV on A 3.3.173 [I.291.6]: aprāptasyeṣṭyārthasya prāptum icchā) と説明する。

⁹⁰ なお、jīvatāt と nandāt はそれぞれ動詞語根 jīv (「生きる」) と nand (「喜ぶ」) の後に祈願を表す IOT 接辞が後続する語形である。A 3.3.173 āśiṣi liṅloṭau // (「祈願に限定された行為を表示する動詞語根の後に IIN 接辞と IOT 接辞が起こる」)

⁹¹ KV on A 3.1.150 (I.210.14-15): jīvatāt jīvakaḥ / nandāt nandakaḥ / āśiḥ prārthanāviśeṣaḥ / sa ceha kriyāviśayaḥ / amuṣyāḥ kriyāyāḥ kartā bhavet ity evam āśasyate / (「【例】彼が生きますように (jīvatāt=jīvakaḥ) 彼が喜びますように (nandāt=nandakaḥ)。祈願とは懇願の一種である。そして我々の体系では、それは行為を対象とする。そのような「願われる」行為の〈行為主体〉でありますように、とこのように祈願がなされる」)

Siddhāntakaumudī によれば、例えば、祈願者である息子が父等に対して述べる表現である (SK 2912 [490.13]:

(18) *aham bhūyāsam jīvakaḥ katham* (「どうして私は私が生きる者であることを願うだろうか」)における *jīvaka* (「私が生きる者でありますように」)は、動詞語根 *jīv* (「生きる」)の後に A 3.1.150 により *kṛt* 接辞 *vuN* が導入されて派生する語である。*jīvakaḥ*は *jīvyāsam* (*jīv*「生きる」1st sg. precative P.)と等価である (SP on BhK 6.86 [I.192.12])⁹²。なお、*jīvaka* という語により祈願の意味が理解されるにもかかわらず、加えて *bhūyāsam* (*bhū*「存在する」1st sg. precative P.)という祈願法を用いるのは、マッリナータによれば祈願の意味をより明瞭にするためである⁹³。

略号及び参考文献

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. See Appendix III (*Aṣṭādhyāyīsūtrapāṭha*) in Cardona 1997.

APV: Liṅgayasūrin's *Amarapadavivṛti*. See Ramanathan 1971.

BhK: Bhaṭṭi's *Bhaṭṭikāvya*. See (1) Bāpata 1887 and (2) Trivedī 1898.

BM: Vāsudeva Dīkṣita's *Bālamanoramā*. See Caturveda and Bhāskara 1958–61. *dhātupāṭha*. See Katre 1967.

gaṇapāṭha. See Böhtlingk 1877.

JM: Jayamaṅgala's *Jayamaṅgalā*. See Bāpata 1887.

KV: Jayāditya and Vāmana's *Kāśīkāvṛtti*. See Aryendra Sharma, Khanderao Deshpande, and D. G. Padhye 1969–1970.

LŚIS: Nāgeśa's *Laghuśabdenduśekhara*. See Sri Guruprasad Shastri, Sri Sitaram Shastri, and Sri Bal Shastri 2012.

MBh: Patañjali's *Mahābhāṣya*. See Abhyankar 1962–72.

Nyāsa: Jinendrabuddhi's *Nyāsa*. See Miśra 1985.

PM: Haradatta's *Padamañjarī*. See Miśra 1985.

PIŚ: Nāgeśa's *Paribhāṣenduśekhara*. See Kielhorn 1868.

ŚKD: *Śabdakarpadruma*. See Deva 1967.

SP: Mallinātha's *Sarvapaṭhinā*. See Trivedī 1898.

SK: Bhaṭṭoji Dīkṣita's *Siddhāntakaumudī*. See Paṅṣīkar 1985.

SKĀ: Bhoja's *Sarasvatikanthābharaṇa*. See Śāstrī 1935.

TB: Jñānendrasarasvatī's *Tattvabodhinī*. See Caturveda and Bhāskara 1958–61.

US: *Uṇādisūtra*. See Aufrecht 1859.

vt.: Kātyāyana's *vārttika*, as cited in the *Mahābhāṣya*. See Abhyankar 1962–72.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 18–22, 28–33. 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962–72.

Aryendra Sharma, Khanderao Deshpande, and D. G. Padhye

1969–70 *A Commentary on Pāṇini's Grammar by Vāmana & Jayāditya*. Sanskrit Academy Series 17, 20. 2 vols. Hyderabad: Sanskrit Academy.

āsāsituḥ pitrāder iyam uktiḥ)。 *Bālamanoramā* は次のような説明を与える。BM on SK 2912 (IV.44.9–10): *āsāsyamānājīvanakriyāśraya ity arthaḥ / evaṃ nandakaḥ / āsīr iti / āśāsanam ayam itthaṃ bhūyād iti prārthanam śabdaprayoktrkartrkam iti yāvat /* (「[*jīvaka* とは、] 願われる生存行為の抛り所という意味である。 *nandaka* の場合も同様である。 *āsīh* 以下について。ようするに、祈願、すなわち『彼がこのようでありますように』という懇願の〈行為主体〉は言語使用者であるということである」)

⁹²BhK 6.86cd 句に対する以下の先行訳は、*jīvaka* という語から理解される祈願の意味をくみ取らない。Fallon 2009: 117.16–17: “I have been betrayed by my kinsman: how can I live any longer?”; M. A. Karandikar/S. Karandikar 1982: 78.13–14: “How would I, opposed by (my) brother, (remain) alive?”

⁹³SP on BhK 6.86 (I.192.12–13): *āsīṣi ca iti dhātumātrād āsīrarthe vunpratayayaḥ / bhāyāsam iti tasyaiva sphuṭārtham anuvādaḥ /* 動詞語根 *bhū* の後への IIN 接辞の導入は A 3.3.173 *āsīṣi linloṭau* による。

- Aufrecht, Theodor
1859 *Ujvaladatta's Commentary on the Uṇādisūtras: Edited from a Manuscript in the Library of the East India House.* Bonn: Adolph Marcus.
- Bāpata, Govinda Shankara Shāstrī
1887 *The Bhaṭṭikāvyaṃ of Bhaṭṭi with the Commentary (Jayamangalā) of Jayamangala.* Bombay: Nirṇaya Sāgara Press.
- Böhtlingk, Otto
1877 *Pāṇini's Grammatik, herausgegeben, übersetzt, erläutert und mit verschiedenen Indices versehen.* 2 vols. Leipzig: Verlag Von H. Haessel.
- Cardona, George
1997 *Pāṇini: His Work and its Traditions. Volume One. Background and Introduction.* Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged, 1997.
- Caturveda, Giridhara Śarmā and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara
1958–61 *Śrīmadbhaṭṭojidīkṣitaviracitā vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī śrīmadvāsudevadīkṣitapraṇīṭayā bālamānoramākhyavyākhyayā śrīmājñānendrasarasvatīviracitayā tattvabodhinīvyākhyayā ca sanāthitā.* 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass.
- Deva, Raja Radha Kanta
1967 *Shabda-Kalpadrum or an Encyclopedia Dictionary of Sanskrit Words arranged in Alphabetical Order giving the Etymological Origin of the Words according to Panini, their Gender, Various Meanings and Synonyms, and illustrating their Syntactical Usage and Connotation with Quotations drawn from Various Authoritative Sources such as Vedas, Vedānta, Nyāya, Other Darśhana, Purāṇetihas, Music, Art, Astronomy, Tantra, Rhetorics and Prosody and Medicine etc..* The Chowkhamba Sanskrit Series 93. Part two. Third edition. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.
- Fallon, Oliver
2009 *Bhaṭṭi's Poem: The Death of Rāvaṇa by Bhaṭṭi.* The Clay Sanskrit Library 45. New York: New York University Press and the JJC Foundation.
- Joshi/Roodbergen. Joshi, S. D. and J. A. F. Roodbergen
2007 *The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini with Translation and Explanatory Notes. Volume XIII (7.4.1–7.4.97).* New Delhi: Sahitya Akademi.
- Kawamura, Yuto (川村 悠人)
2012 「Bhaṭṭikāvya 8.70–93: Aṣṭādhyāyī 1.4.24–55 と 1.4.84–98 の例証」『比較論理学研究』9: 85–124.
2013 「バッティ、カーティアーヤナ、パタンジャリ—Bhaṭṭikāvya 6.87–93 における Aṣṭādhyāyī 3.2.1–16 の例証—」『南アジア古典学』8: 75–108.
forthcoming “On Bhaṭṭikāvya 9.8–11: sicivṛddhyadhikāra.” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 63-3.
- Leonardi, G. G.
1972 *Bhaṭṭikāvyaṃ: Translation and Notes.* Orientalia reno-traiectine 16. Leiden: E. J. Brill.
- M. A. Karandikar/S. Karandikar. Karandikar, Maheshwar Anant and Shailaja Karandikar
1982 *Bhaṭṭikāvyaṃ: Edited with an English Translation.* Delhi: Motilal Banarsidass.
- Katre, Sumitra Mangesh
1967 *Pāṇinian Studies I.* Deccan College Building Centenary and Silver Jubilee Series 52. Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute.
- Kielhorn, Lorenz Franz
1868 *The Paribhāshenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa.* Part I: The Sanskrit Text and Various Readings. Bombay: The Indu Prakash Press.
- Miśra, Śrīnārāyaṇa
1985 *Kāśīkāvṛtti of Jayāditya-Vāmana (along with Commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jineन्द्रabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra).* Ratnabharati Series 5–10. 6 vols. Varanasi: Ratna Publications.
- Narang, Satya Pal
1969 *Bhaṭṭikāvya: A Study.* Delhi: Motilal Banarsidass.
- Ogawa, Hideyo (小川 英世)
2005 *Process and Language: A Study of the Mahābhāṣya ad A 1.3.1 bhūvādayo dhātavaḥ.* Foreword by George Cardona. Delhi: Motilal Banarsidass.

Paṇṣīkar, Vāsudev Lakṣmaṇ Shāstrī

1985 *Siddhāntakaumudī with the Tattvabodhinī Commentary of Jñānendra Sarasvatī and the Subodhinī Commentary of Jayakṛṣṇa*. The Vrajajivan Prachyabharati Granthamala 5. Bombay: Nirṇaya Sāgara Press, 1915. Reprint, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishtan, 1985.

Ramanathan, A. A.

1971 *Amarakośa [I] with the Unpublished South Indian Commentaries. Amarapadavivṛti of Liṅgaya-surin and Amarapadapārijāta of Mallinātha*. Madras: The Adyar Library and Research Centre.

Śāstrī, K. Sāmbaśiva

1935 *The Sarasvatīkaṅṭhābharāṇa of Śrī Bhojadeva with the Commentary of Śrī Nārāyaṇaḍaṇātha*. Part I. Trivandrum Sanskrit Series 117. Trivandrum: Government Press.

Śāstrī/Kudāla. Śāstrī, Raghunāth Kāśīnāth and Śivadatta D. Kudāla

1937 *Patañjali's Vyākaraṇa Mahābhāṣya with Kaiyaṭa's Pradīpa and Nāgeśa's Uddyota: Edited with Footnote, Collected from Chhāya Padamañjari and Śabdakaustubha as well as Supplied by the Editor's Own Originality*. Vol. III. Bombay: Pāṇḍurang Jāvājī.

Sri Guruprasad Shastri, Sri Sitaram Shastri, and Sri Bal Shastri

2012 *Vaiyākaraṇa Siddhāntakaumudī of Bhaṭṭojidīkṣita with the Commentaries Tattvabodhinī of Jñānendra Sarasvatī; Bāḷamanoramā of Vāsudeva Dīkṣita and Laghuśabdenduśekhara of Nāgeśa Bhaṭṭa; Subodhinī (on Swara-Vaidika) of Jayakṛṣṇa Maunī and Candrakalā (on Liṅgānuśāsana) of Bhairava Miśra*. The Chaukhamba Surbharati Granthmala 477. 2 vols. Varanasi: Chaukhamba Surbharati Prakashan.

Trivedī, Kamalāśankara Prāṇaśankara

1898 *The Bhaṭṭi-Kāvya or Rāvanavadha Composed by Śrī Bhaṭṭi: Edited with the Commentary of Mallinātha and with Critical and Explanatory Notes*. Bombay Sanskrit Series 56–57. 2 vols. Bombay: Government Central Book Depôt.

(かわむら ゆうと、(独) 日本学術振興会特別研究員 PD [インド哲学])

A Study of *Bhaṭṭikāvya* 6.71–86: *nirupapadakṛdadhikāra*

Yuto Kawamura

In *BhK* 5.97–7.85 Bhaṭṭi illustrates Pāṇini's grammatical rules which introduce *kṛt* affixes after verbs. According to the commentators Jayamaṅgala and Mallinātha, the *kṛdadhikāra* constituted by *BhK* 5.97–7.85 is divided into subsections:

- (a) *īādhikāra* (e.g., *vane* + *car* + *Ṭa* → *vanecara* 'one who does penance in the forest')
BhK 5.97–100 → A 3.2.16 *careṣ taḥ*–A 3.2.23 *na śabdaślokalalahagāthāvairacātsūtramantrapadeṣu* //
- (b) *kṛtyādhikāra* (e.g., *pracch* + *tavyaT* → *praṣṭavya* 'that which is to be asked')
BhK 6.46–67 → A 3.1.95 *kṛtyāḥ*–A 3.1.132 *cityāgnicitye ca* //
- (c) *nirupapadakṛdadhikāra* (e.g., *kṛ* + *ṆvuL* → *kāraka* '[Sugrīva,] who forms [a friendship with Rāma]')
BhK 6.71–86 → A 3.1.133 *ṇvulṛcau*–A 3.1.150 *āśiṣi ca* //
- (d) *sopapadakṛdadhikāra* (e.g., *śatru* + *lū* + *aṆ* → *śatruḷāva* 'one who destroys an enemy')
BhK 6.87–93 → A 3.2.1 *karmany aṅ*–A 3.2.16 *careṣ taḥ* //
- (e) *khaśādyadhikāra* (e.g., *sattva* + *ej-i* + *KHaś* → *sattvamejaya* '[lions] which scare animals')
BhK 6.94–108 → A 3.2.28 *ejeḥ khaś*–A 3.2.47 *gamaś ca* //
- (f) *dādhikāra* (e.g., *dūra* + *gam* + *Ḍa* → *dūraga* '[arrows] which fly far')
BhK 6.109–6.111 → A 3.2.48 *antītyantādhvadūrapārasarvānanteṣu ḍaḥ*–A 3.2.50 *ape kleśatamasoḥ* //
- (g) *sopapadakṛdadhikāra* (e.g., *śīrṣa* + *han* + *ṆinI* → *śīrṣaghātin* '[Rāma,] who cuts a demon's head off')
BhK 6.112–133 → A 3.2.51 *kumārasīrṣayor ṇiniḥ*–A 3.2.101 *anyeṣv api dr̥ṣyate* //
- (h) *nirupapadakṛdadhikāra* (e.g., *kṛ* + *Kta* → *kṛta* 'that which has been done')
BhK 6.134–136 → A 3.2.102 *niṣṭhā*–A 3.2.104 *jīryater atr̥n* //
- (i) *tācchīlikādhikāra* (e.g., *kṛ* + *tr̥N* → *karṭṛ* 'that which habitually [shakes the forest]')
BhK 7.1–27 → A 3.2.134 *ā kves tacchīlataddharmatatsādhukāriṣu*–A 3.2.178 *anyebhyo 'pi dr̥ṣyate* //
- (j) *nirviśeṣakṛdadhikāra* (e.g., *kṛ* + *uṆ* → *kāru* '[Sugrīva,] who accomplishes [Rāma's purpose]')
BhK 7.28–33 → A 3.3.1 *uṇādāyo bahulam*–A 3.3.17 *sṛ sthīre* //
- (k) *ghaṇādyadhikāra* (e.g., *naś* + *GHaṆ* → *nāśa* 'the act of perishing, perishment')
BhK 7.34–85 → A 3.3.18 *bhāve*–A 3.3.128 *āto yuc* //

This paper considers (c). The commentators call *nirupapadakṛt* *kṛt* affixes provided for by A 3.1.133–150. The occurrence of these *kṛt* affixes, except for *Ka* (A 3.1.136) and *Śa* (A 3.1.137), is not conditioned by a co-occurring item (*upapada*). The following points are to be noted:

1. Bhaṭṭi's expression *dhārayaiḥ āmodam* ('[the wind] which carries a pleasant fragrance') to illustrate A 3.1.139 *dadātidadhātyor vibhāṣā* is problematic. For, a genitive ending should be introduced by A 2.3.65 *karṭṛkarmanoh kṛti* after *āmōda* to denote an object (*karman*) since *āmōda* is construed with *dhāraya*, which ends in the *kṛt* affix *Na* (→ *dhārayaiḥ āmodasya*). Jayamaṅgala justifies the expression by saying that the introduction of a genitive ending by the rule is not obligatory (*antītya*).
2. In the Bhāṣya on A 3.1.145 *śilpini ṣvun* Patañjali states that the *kṛt* affix *ṣvuN* is introduced only after the verbs *nṛt* 'dance', *khan* 'dig up', and *rañj* 'dye'. Bhaṭṭi, who accepts this restriction on verbs in which the rule applies, uses the form *nartaka* ('dancer', *nrt* + *ṣvuN* → *nartaka*) to illustrate the rule.
3. Bhaṭṭi does not illustrate A 3.1.147 *ṇyuy ca*. A 3.1.146 *gas thakan* provides that the *kṛt* affix *thakan* is introduced after the verb *gai* 'sing' to denote an agent if the agent is an expert in singing (*śilpin*). A 3.1.147 provides that the *kṛt* affix *ṆyuyT* also occurs after the same verb under the same meaning condition. These two rules can form a single rule. Bhaṭṭi holds that for the purpose of illustrating the rules it suffices to illustrate A 3.1.146.